

公開シンポジウム

神社の造営と祭祀——伊勢と出雲——

〔日時〕 平成二十五年七月六日（土）

午後一時三十分～五時

〔会場〕 國學院大學渋谷キャンパス

学術メディアセンター棟一階常磐松ホール

〔主催〕 明治聖徳記念学会

〔共催〕 國學院大學研究開発推進センター

# 「祭りの場」を調えることの意味

——祭祀としての造営を考える——

櫻井 治男

ただいまご紹介いただきました櫻井と申します。約一時間ほど、掲げましたテーマで話をいたしたいと思います。先ほど「熱中」の話が出ましたが、実は私の住んでおります伊勢市もいよいよご遷宮を迎えまして、ご遷宮といいましても神様のお遷りになる遷御の儀を控えまして、町のほうで白石持行事が行われます。そのことで市民ともども準備に熱中をしている。そういう中で本日、登壇させていただきます。

## 御井の清水

さよウのテーマの中心は神社ということで、先ほど阪本先生からもご紹介がありましたけれども、神社というのは基本的には神様をお祭りする場ではありますが、そこで祭りということが営まれ、同時に人々がいろいろなかたちで

神社を中心として結びついている。そういう場であろうと思います。さて皆さんのお手元の資料（はじめに―②）一枚目の二番目に伊勢の神宮の式年遷宮のはじまりということを書いております。神宮の史料によりますと、持統天皇の御代に初度の遷宮が行われたということになっております。

この持統天皇の御代で思い出しますが、万葉集の歌なんです。これは持統天皇が新しく宮を、宮都をおつくりになり、これは藤原宮と申し上げますが、その宮をことほぐ言葉でもってお祝い申し上げる。そうした歌が万葉集に出ております（資料「はじめに」―①）。長歌ですが、その二行目のところに、藤井が原に宮殿を始められまして、そして、この御殿が永遠に、そしてこの都が永遠であるよう

にということ、湧き出る水が「つねにあらめ 御井の清水」、これは最近「すみみず」と訓んだりもしますけれども、私もちょっと古いものは「ましずみ」と習い、そう訓んでおります。湧き出る水の力強さにたとえてことほぐということ。それが新しい都の永遠性を歌っている。このような歌があります。そうした湧き出るような力なり、常に絶えないような流れ、こうしたものが一つの感性としてお祭りの中にもかかわって登場するんじゃないかなと思うわけです。そうした意識を具体的にどのようなかたちで祭りという行為のなか、あるいは祭りの場というなかで示されていくかということ、きょうは私なりに考えを進めていきたいとおもっております。

もとより、それぞれ伊勢の神宮について、そして出雲大社につきまして、ご専門の先生方もいらっしゃいますし、これまでも多くの研究がありました。そうしたご研究等をすべて私自身が把握しているわけではありませんが、いくつか考えるところを申し上げて、ご指摘やお教えをいただきたいとおもっております。

## 英国のメーデー行事

ところで、祭りの場を調えるということになりますと、これは世界の民俗のなか、あるいは行事のなかでもあるんじゃないだろうかと思ひまして、昔訪問したことのある英

国の民俗行事のことについて三番（資料「はじめに」——③）に紹介させていただいております。『Dressing the well』とありますが、これは井戸、あるいは泉というものを飾り立てるといふ行為なんです。内容につきましては資料に掲げましたけれども、その場面を資料に印刷はできませんでしたので、画面のほうで見ていただければと思います。

これは、下のほうが泉です。ここに板を張って、そこに十字架のシートが貼ってあるんでしょうか。上部に「受難」と書かれているんですが、これはちょっと現代ふうですね。サングラスをかけたお兄さんが描かれておりますが、この周囲を見ていただきますと、緑の葉を描いたり、あるいはその背景には常緑の木で飾るということをやっております。こちらのもうすこし古い写真を見ますと、こうした民俗行事について紹介した英国の本があるのですが、それに掲載されている写真（次頁）を見ますと、手前の男の人たちが伐っておりまゝものは、日本でいえば櫛に相当する、広葉樹のオークの枝だろうと思います。これを用いて井戸を飾る。しかも、井戸は共同の井戸。すなわちみんなが使う井戸という性格をもっているわけです。共同体の井戸を利用するということは、一人が井戸を大切にしないということが起こりますと、みんなのためにならない。共同体が生きるためにも重要な場所だということがあらうかと思



Well Dressing (Tissington, Derbyshire, UK)

Brian Shuel, *The National Trust Guide to Traditional Customs of Britain*, 1985, Exeter, p.94 より転載。

います。

もう一枚の写真は場所が違いますが、湧き出る泉を石で囲ってありますが、これも子供たちが花を飾って、その行事に臨んでいる。これはちょうどメーデーの頃です。日本でメーデーと言うと「労働者の祭典」とすこし異なった意味で使っておりませんが、私はそんなにヨーロッパ等の民俗のことを知っているわけではありませんが、メーデー行事といえますと、冬から夏という大きな季節の転換の時、その時に新しい季節を迎えて青々とした緑で井戸を飾ったり、あるいはメイポールという五月柱を立てて、それを飾って、その周囲でダンスを踊ったりするというのがあります。もちろんこうした行事が途中ですたれて、復興されているということはありますが、このような季節の変わりごとに、そして毎年ここで祭りの場所を調べていく。そのような行事というのは、ある程度普遍的に見いだせるのではないかと思うわけです。

#### 伊勢の遷宮諸祭行事

さて、本年平成二十五年というのは、先ほどもご挨拶にありましたように、出雲大社と伊勢の神宮におかれましては、遷宮という非常に意義深い年に当たるわけです。出雲大社では五月十日に本殿の遷座祭を斎行されました。そして、いろいろな奉祝行事もほぼ滞りなく済ませてこられた

と伺っております。伊勢のほうですけれども、いちばん中心となる神様が新しい御殿にお遷りになるとき、これは遷御と申し上げておりますけれども、皇大神宮、豊受大神宮、ご承知のように伊勢は内宮と通称されるお宮と外宮というお宮、両宮が中心のお宮なんです、それぞれ十月の二日と五日に斎行される予定であります。このことは陛下から日にちをご治定いただいてとり行われるという非常に重要な儀式が営まれるわけですが、これは夜に行われます。

こうした伊勢における遷宮の流れのなかで、昨年从今年にかけての分だけを一覧にしてみましたのが、次の二番目（資料Ⅰ―②）のところです。しかも、皆様方の資料には重要と申しますか、話にかかるところに傍線を引いております。たとえば平成二十四年を見ていただきますと、立柱祭というのがあり、その横に行っていたきますと、上棟祭、一般の家でいえば棟上げに当たるような行事があり、さらに檐付祭という屋根を調べていく行事があります。この中に、立柱祭の同日に行われたものとして御形祭という儀式がありました。これは神宮のご社殿の妻、すなわち正面から見たのではなくて、横側から見た三角形の部分のところの押木押櫓に円形の文を刻されるという、建物そのもののへ特別な儀式をなさる。昨年度はそうした儀式が済み、これによって新しいお住まいが完成してきたというところまで続くわけです。

さらに本年になりますと、二つ目のところに御戸祭、お扉に関する行事です。それから、三番目の御船代奉納式。御船代というのは御神体がお納めされる祭具ですが、それを調える行事があります。そして四番目に洗清という、最終的に建物をきれいにされる行事があります。その次に心御柱奉建ということが予定されています。心御柱というのは、神宮のご正宮の建物の床の真下に立てられている、とても嚴重な取り扱いのなされる柱なんです。私どもも文献でしか、そのことは知りませんが、非常に重要な柱である。そうしたものが立てられる行事があります。そのあと杵築祭。これは柱根を固める儀式。そして後鎮祭という、建物もすべて建て上がり、御敷地を鎮めるお祭りが続き、そして遷御を迎えますと、その前日と当日の行事の中にまた建物にかかわる儀があります。それが遷御当日の御飾と呼ばれる行事です。祭場にかかわって、それを飾りつけるという意味合いをもつ儀式であるわけです。昨年、そして今年、祭場の中でもとくに建物に対して、それから、祭りのことにかかわって重要な行事として御形祭、あるいは心御柱奉建、そして御飾というものの、ちょっと注目をしておきたいと思う行事があります。

なお、この資料には線を引きましたが、平成二十

五年の最初に書いてありますお白石持ちという行事ですが、これは新しいご社殿がほぼ完成したその敷地に、伊勢の住民、それから今年では全国からもおいでになります、そこに白い石をご正殿の建っている御垣内までお納めに行く行事です。これは現在では七十七の奉獻団というのができておりまして、それぞれが外宮と内宮に宮川という川で拾った白い石をお納めに行くわけですが、このことも祭場を考えるとときには大事なところです。これらのことについては、この話のあとでさらに考えていきたいと思います。ここでは、伊勢の遷宮がまもなく行われるにあたってどういう行事の流れがあるか、そういうなかで私なりに祭場を調べていくという点で注目しておきたいものを最初に指摘させていただきます。

#### 祭場を調える

さて、こうした伊勢の遷宮は非常に規模も大きいし、出雲も当然ですが、このような伝統行事を伊勢独自で深く研究をし理解をするということはとても重要なことであり、当然その深まりというのを私どももいろいろお教えいただくわけですが、もう一方では、全国にあるいろいろな神社や民間の行事のなかでお祭りをを行うにあたって、それぞれどのようにして祭りの場を調えられるのかという材料も合わせながら、この問題を考えていくということも試みてよ

いかなと思うところです。そういう点で、これからしばらくはそうした祭りの行われる場のしつらえについてということで、すこし事例等をお示ししながら話を進めたいと思います。

最初に「祭りの行われる場」という項目の一番目に、神社本庁の「神社祭式」規程を掲げました（資料―Ⅱ①）。一般に神社でお祭りが行われますときに、式次第としてこのようなことがいちばん最初に出てまいります。たとえば例祭。例祭というのは神社のなかで年中の恒例のお祭りなんですけれども、とくにそのお社で重要なお祭りですね。一般の神社でいえば祈年祭と新嘗祭があるとともに、もう一つ、その一社特有のお祭りというのが例祭になっていることが多いわけです。そのときを見ますと、行事の当日の朝早くに「社殿を装飾す」という表現が出てきます。すなわち、お祭りが始まるにあたって社殿を飾るという意味なのだろうと思います。それはいろいろなお社でなされ方が違うとは思いますが、始まるにあたって装飾することが重視される行為としての位置づけになっていることは、改めて注目しておきたいところです。

その次には神幸祭という言葉が出てきます。それとともに、御旅所という言葉が登場しますけれども、神社のお祭りの中にはご本殿、別に御旅所という施設を設けられまし

て、神様を御神輿さんに乗せて御旅所にお遷りなっていたいて、また御旅所からご本殿に戻るといふ行事があります。いろいろな形がありますけれども、代表的なものといえますと、七月の時期ですと、京都に八坂神社というのがあります。祇園祭というお祭りがなされます。この祇園祭のときには、八坂神社は鴨川の東にお社がありますが、この御旅所というのは京都の街の中にあるんです。そこを大政所と称しますが、祇園祭に先立って神様が御神輿さんに乗られて御旅所のほうにお遷りになる。その期間が一日や二日ではなくて、比較的長い。約一か月ほどでしたか、そこに滞在をされているわけです。

もちろん御神輿さんで神様は本社へまた戻られるのですが、そのなかで大事なことは、祇園祭の華やかな場面といふのは、山鉦の巡行と呼ばれる行事があります。その山鉦の巡行というのは、かつては街の中でお祭りをされている神々をご本社へお送りするという性格をもった行事なのです。ですから、ご本社から御旅所に遷られるとき、あまり知られない状況で儀礼があり、そして、お戻りになるといふスタイルのときには非常に華やかにしてみんなでお送りする。それを祇園祭の一つの古いかたちとして捉えることができるわけです。そうしますと、その御旅所というのはご本社とともに非常に大事な場所であり、そこを調える、

そして祭具、いろいろなお祭りに用いる道具を調えたうえでお祭りが行われるという点では、私たちはご本社だけではなくて、祭りにかわる場所というのがいろいろなかたちで調えられるという面も含めて見ておく必要があるかと思うのです。

#### 社殿と祭場

さて、そうしたなかで社殿と祭場との関係について少し振り返っておきたいと思います。お祭りが成り立っている要素として注目したいのは、時・人・場であると思うのですが、もちろんその前提としては神様がいらっしゃるわけです。その「時」というのは普段の時でない。特別な時間帯ということです。「人」というのも、私たちが普段の状況でない人となってお祭りに参加させていただく。それから「場」というものも、日常的には見過ごしている、何かあったなというふうにあまり意識していなくても、お祭りのときには提灯が飾ってあったり法被姿の人々がそこらへんにたむろしているように、特別な場という要素を呈しているところではないかと思います。

そうした場の中で、今日的には神社というものがそれぞれ建物において神々をお祭りする姿というのが一般的ですが、そうしたなかで社殿と呼んだり、あるいは神殿と呼んだり、あるいは祭殿と呼ばれたり、古い記録の中では祠と

いう表現が出てきます。遷宮に合わせたの議論のなかでは、やはり建物というものがどういふ建物であり、それはどのような規模であり、いつごろからそうした建物が建てられていくようになるんだらうというのが、大きな関心事として議論をなされてきました。

とくに伊勢と出雲というところはそれぞれが日本の代表的な神々をお祭りするお社ですので、そこでの議論がこれまでになされてきたわけです。これについてはのちほどシンポジウムで登壇いただきます錦田先生がまとめていらっしやいます。私はそれをちよつと拝見してきただけなのですが、一つの研究関心としての古代の神殿論というものが建築史学、あるいは文献史学、さらには考古学のなかで議論がなされてきました。錦田先生のご指摘によりますと、研究動向としては非常に多様化、複雑化を呈している。そういう複雑な内容になると、私も理解できないのですが、なぜ多様化、複雑化を呈するかというと、ここに三つほどの理由を示していらっしやいます。

一つは神殿と呼んだり、祭殿と呼んだり、神社というのは、いろいろと定義の問題がありますよとおっしゃっています。その内容については資料(Ⅱ―②―(2))に紹介させていただいておりますけれども、神殿とは何を指してとらえるのがいいのか、あるいは神社という場合も歴史的に

はどういうものを神社と言ってきたかという検討がなされて、それぞれ用語定義をどう位置づけるかによって課題もあらうと。資料に掲げたように、神殿、社殿、祭殿、そして祠としましたが、実は、伊勢の神宮が現在の伊勢の地に奉斎され、大神が祭られたときには、五十鈴の川のほとりに「祠」を立つという表現が出てきます。その祠というのはどういふものだろうか。すなわち、ある程度の建物を想定してとらえていくのか、それともお祭りの場としてのなんらかの施設としてとらえていくのか。そういう点でもなかなかわかりにくいところがあるわけです。そうした中で一つ議論が盛んに行われる背景の中に、こうした用語の問題があるということ。

それから、二つめには巨大な掘つ建て柱の建物をどうとらえるか。これはのちほどのシンポジウム等でもご議論にならうかと思しますので、話題をここのあたりで提供させていただきます。

古代神殿というものに関連して神社建築の成立過程をどのようにとらえるかという点で、これまでですと、非常に簡単な祭りのしつらえから、磐境と呼ばれるような特別な堅固な施設、しかし、そこにはあまり建物は想定されていないようなものから、やがては仮設的なお社がつくられていき、お祭りが繰り返されることに常設化していった。こ

ういう発展図式的にとらえられてきたことに對して、そうした図式に一元的に帰せられるほどのすべての神社が存在してきたわけはありません。奈良県の大神神社のように拝殿はあるけれども、ご本殿はないというお社がいまもあるわけですから、そのようなものも含めて祭りの場としてとらえていこうとしますと、もうすこしいろいろな可能性を残した議論も必要になってくるかと思ひます。

### 遷宮と遷座

さて、こうした社殿を造宮するにあたつて、一般に私どもは遷宮とか遷座という言葉を使つていますが、戦前期に出た「神道大辞典」では、遷宮と遷座ということについて示しましたような説明をしています（資料Ⅱ―③）。遷宮というのは、神宮または神社の神座を遷し奉ることだ、遷座ともいうんですよ。これを正遷宮と仮殿遷宮とに分けていますという説明がなされています。その次には遷座祭として、ここには神殿の改造または修繕のときに神様にいったん仮の建物に遷つていただき、そしてまたもとの修復なつたところへ遷つていただく。神様が移動される。それを遷座といつております。しかも、それが一定の年限を隔てて行われるもの、すなわち定期的な遷座のお祭りを式年遷宮とか式年遷座祭と称していますと出てきます。

このような説明でいきますと、たしかに現在各地で行

われますお社も、遷座とおつしやる場合もありますが、けつこう最近では遷宮というふうに使われる場合も多くなつております。私もその経験をよくいたします。と申しますのは、伊勢地方では伊勢の神宮にならつてだろうということも考えられますが、村のお社で二十年ごとに社殿を建て替えるところが、一定の広がりをもっています。ただ、それはこれまでだとあまり遷宮とは言つてないんです。どういうふうに言つていたかというのと、「神遷」とか、「御大儀」という呼称があります。標札に「御大儀」と書いてある。何かといへば、それは社殿を新しくしてお祭りをされている、そのことをおつしやるわけです。あるいは「宮だち」とか「造宮」というような、多様な地域ごとの呼び方が、遷宮という表現に整えられてきたようなところがあります。

しかし、ここで辞書を引きましたように、遷宮にしる遷座にしる、神様のいらつしやる場、あるいは祭りの場を調えるなかに、お遷りをいただくという意味は「神霊のために宮殿を新にし、一段と神威の輝きを拝し奉らんとするにある」という趣旨をもつ営為なんだと。こういう点では建物、あるいはそのいまし場所という点で、神霊のいらつしやる場所を新たにすること、そして神威の輝きを拝し奉らんとする趣旨なんだということに一つの特徴を

もった説明をうかがうことができるわけです。

## 祭りのはじまりと祭場

先ほど私は十月の初めに行われるのは神様が実際にお遷りになる遷御と申しましたけれども、平成二十五年十月は神宮の遷宮が行われるという表現も一方ですてしております。すなわち、諸祭諸行事、あるいはそのなかでのいくつかの特徴あるものも含めて全体を遷宮と言っている場合と、ある場面を遷宮と言っている場合、これが混乱というよりは、なぜそういう呼び方をされるんだらうということを考えますときに、一つの問題の立て方として、資料Ⅲの「祭りの『はじまり』と『祭場を調える』こと」という点から改めて振り返ってみたいと思っております。すなわち、遷宮という意味、これは一般にお祭りも含めて、神様の座をしつらえるということは、そのお祭りの前提として位置づけるのか、そのこと自体をも一つの祭りの行為としてとらえるのかというのを、細かい議論になるかもしれませんが、改めて考え直してみる必要はないだらうかと思っています。そういう点で「祭りの『はじまり』と『祭場を調える』こと」ということで示させていただいたわけです。

まず最初に、お祭りが始まるときに、その祭りの場所とというのはいろいろなかたちで調えられる。その調えられるというのを、先ほどの祭りを構成する時と場と人という観

点から、場に注目してみますと、どこまでがそのお祭りを行う社会の範囲であるかということを確認される行為というのがあるわけです。その代表例として二つ挙げておきました。

一つは奈良県の石上神宮のことです。これは十一月に「ぼうしん傍示浚神事」という呼称で登場する儀式であります。内容的には古い時代の行事を示しておりますが、奈良県天理市の石上神宮、布留郷という一つの村を超えて複数の村が存在する比較的広い地域の郷の各境に、川の砂を盛り上げて芝生を載せて榊を立てるという行為が行われます。かつては溝を実際に掘って杭を立てるということですから、傍示というのは境界地点という意味ですが、それを浚うという行事があります。このような神事は、この祭りが行われる社会の空間的な範囲を確定するという行為ではあるんですが、そこに芝生を載せ榊を立てるという行為を伴っているということは、ちょっと注目しておきたいと思います。

もう一例は石上神宮のように大きなお社ではありませんが、京都府の木津川町にある涌出宮もいでのみやというお社で二月に行われております「いごもり居籠神事」です。この神事は、その社がある氏子区域の重要なポイント、たとえば川上であつたり、いちばん川下であつたり、あるいは村の北の境、あるいは南の境、そういうところに石上神宮と同じように砂を盛り

上げて神を立ててくるとか、あるいは、今度はさらにもつと限定して境内の四隅にそうしたものを立てるということがあります。京都の上賀茂、下鴨のお社においでになった方、そうした盛り砂があるのをご覧になったことがあろうかと思いますが、ああいうかたちで立てられているわけです。

すなわち、こうした事例をいくつか見てみますと、お祭りの場というものが最初は広い空間から徐々に祭儀の中心的な時を迎えますと、空間が狭められてくるというか、特定されて、そこに集中化されていくという特徴をもちます。そしてもう一つ、先ほど申しましたように、こうした祭りの空間の確定というものが祭りの前提として行われるのか、それこそこれも一つのお祭りとしてとらえることができるのかということによって、お祭りの考え方もすこし違ってくるように思います。そういう点でまず最初に祭りの空間の確定ということで指摘をさせていただきました。

その次に、じゃ、そうして確定をしたあと、祭りの場を飾るにあたってどのようなことが行われるかをみますと、その場の一層の清浄化といましようか、清らかにしていくという行為があります。そして、神様をお祭りするご社殿の場合はさらにその建物そのものを一層聖なるものとして、普通の建物じゃないんだよ、神様のお住まいになる建

物だという意味での聖別化ということがあります。そういう行為が祭りの場を飾るという行為と深く関連しているんじゃないかということをお自身が思いますので、こちらのほうで二点を掲げさせていただきました。

#### 神座を調えること

さらに、その中で神様がいらっしゃる場、これを神座を調えるという観点で二点ほど申し上げたいと思います。神座を調えるという点では、先ほど辞書を挙げて遷座祭とか遷宮祭という建物を中心として神様の移動の説明がありますけれども、実は、神様の座を更新する、新たにすることというのは各地の神社でも事例が見られます。

愛知県津島市の津島神社です。ここは現在は津島祭りと言っております。明治以前は津島牛頭天王社と呼ばれたお社ですが、明治の神仏分離によって津島神社となるわけです。お祭りの中に御葦放、「みよしはなち」あるいは「みよしながし神事」というのがあります。現状は私は知りませんが、いくつか文献によって知りうる場所では、ご本殿の内陣にアシ、ヨシで一つの束をつくる。それは内陣に奉獻される。あと、外陣のほうに九つの束。それがまた奉納されるわけです。内陣のものも毎年交換されて、外陣のものと合わせて、それらを川に流すという行事です。これを御葦放神事というわけです。神様の座を更新する、交換



三重県多気郡明和町佐田  
平成25年7月15日撮影（櫻井）

するという行為を表しているというふうにとらえることができるのではないかと思います。かつては十二束の藁であつたようです。十二束は一年ということを意味するわけでしょうけれども、そうした座を調べていく行事。現在はお本殿の中にはご神座というものをしつらえて、こちらは伝統的な、いわば古儀の特殊神事的な扱いになりますけれども、こうした特殊神事といわれるものの中にもかつての神様のいまし場所をどうとらえてよいかということの材料が潜んでいるわけです。ほかに佐太神社や須我神社でも御座替神事というものが行われています。

そのような御座替の神事を含めて、御座を奉るという行為のなかで私がどうしても気になるのが、大嘗祭における儀式の中で八神をお祭りする殿舎のことです。これを「デ

ンシャ」と申し上げてよいのかどうかわかりませんが。資料的にはここに「貞観儀式」の踐祚大嘗祭儀の中の一節を掲げました。八柱の神をお祭りする。その殿は片廂として、青い草をもつて葺きなさい、その内部に竹の棚を置いて、その高さは四尺ほどである。そしてそこに、「席」というのは筵むしろですが、筵を敷いて神の座とせよと書いてあります。すなわち、棚を設けて筵を敷くということ。これが八枚敷かれるわけですが、その行為そのものが神様をお祭りするというふうにも受け止められる記事なのです。これは明治以降になりますと、神籬を立てた行事として、神霊を招くということが明確に意識されていきますけれども、こうした記事は、いま私どもが考え行っているのは、ひよつとしたら意識的には違った神様のお祭りの仕方が考えられるわけです。そういう意味で、神座を調えるということは、そこに神様をお迎えして、ということなのか、敷くこと自体が神様をお祭りしているというふうにも受け止められる、ということをするこし注視することも必要ではないかと思うところ です。

そうした中で、民間の事例として私の住んでおります近くの例を示しましたが、これは具体的に見ていただいたほうがいいと思いますので、写真をお示しします。毎年、屋根は麦藁ですが、それはぶ厚い屋根をしっかりと葺いて、構

造体は非常に簡単だけれども、このような竹でつくったご社塔を設けます。これは移動しないものですから、道にそのままとなつて、毎年七月の十四日ぐらいにお立てになるんです。村の方にお願ひして正面の御簾をあげ拝ませていただきましたが、お札を納めお祭りをされておりました。こうしたかたちも、毎年の神様の居場所をお替えになる。そういう意味では毎年の遷宮のような意味合いをもつことが、民間のなかでも行われているところです。

このような点から考えますと、資料⑤に示しましたように、祭りの場を調えるという意味では、殿舎を造替したり、御座を替えたり、あるいは御座を敷くという行為とか、あるいは、神様の衣装を奉られることとか、祠や社壇を築くようなこと、あるいは柱を立てるようなこと。中には、鳥居を立てる。その行為が祭りの場を調えるということもありましょう。そうしたなかで十一ぐらいまで考えられるところを書き上げました。その他として「橋を架ける」というのは、すこし伊勢神宮の行事にも関係するところです。

そういうことを見ますと、これをもお前は遷宮と言うのかと言われると、遷宮の概念の議論になります。やはり定期的に祭りの場を改めて調えていくという意味でいえば、私どもはいまご造替ということで、建物をお建て替える

ことを遷宮と言っていますが、いろいろなかたちの遷宮がありえたんじやないかということをお願い浮かべる可能性をもっていると考えます。

### 伊勢の遷宮

最後に、神宮のお祭りと遷宮のことに關して簡単に申し上げたいと思います。神宮のお祭りというのは、ご承知のように、日毎朝夕の大御饗祭と呼ばれる毎日、朝と夕方に神様にお食事を奉る祭りがあります。それが行われるのは、現在外宮にあります御饗殿という場所です。それから、年中の恒例のお祭りがあり、これはとくに三節祭という六月と十二月の月次祭と、秋の收穫を迎えた、新しいお米をこれから使わせていただくために神様にお供えする神嘗祭というのがあります。これは現在十月ですが、陰暦では九月でした。それから遷宮。こういう三種の重要なお祭りが行われるわけです。遷宮の行事の大きな構成としては資料(Ⅳ-②-①)の(ア)から(オ)というスタイルを、古代的な遷宮のなかで重要なものとしてとらえておく考え方は、私もなるほどなと納得しております。(ア)の心御柱の部分はあとで議論になるかもしれませんが、ご正宮の正殿真下に建てられる柱があります。なぜこれを取り上げるかというと、明治四年の神宮制度の改正までは、心御柱の前で神々へのお供えものをなさり、神事が営まれていたという

重要な場所であるからです。そして、そのあと遷御が続きます。

内宮というのは天照大神をお祭りするところ、そして、外宮は天照大神に食物をご奉仕する豊受大神が祭られているところですが、平安時代の初め頃の神宮の記録を見ますと、三節祭のときには、外宮の神が内宮の場所においてになって、最後の調理を済せられて天照大神に奉られるということになっています。そのときに、この正宮の前面の御裳裾川に中州がありまして、そこに外宮の神様のいましどころとしての石畳がしつらえられます。これをしつらえる担当者が造宮使、すなわち神宮の社殿を建てるために都から派遣されてくる人の責任である。そして、中の島の石畳に渡るための橋を、これは度会郡司の責任において架ける。これは毎年の恒例のお祭りのときに利用されるわけですが、それでも、その架け替え行為そのものと造宮の行為が一連のものとして扱われているということに深い意味を感じるわけです。

いまは、内宮へおいでになりますと、蕃屏のありますところから石段を上るわけですが、ここに御贄調舎という施設があり、そこに豊受大神がおいでになる、というふうに伺っているところです。こうした場、いまは川中、それはありませんけれども、そうした行為が行われていた

ということも大事なことであろうと思います。

遷宮にあたりましては、最終的に遷御の前に御飾という行事があります。これは遷宮の旧祭典図から取り上げたのですが、この中で現在の行為はちよっとおきまして、平安時代の記録等で考えますと、建物の外側は中央から来られたその諸役の人たちが金物を打ったり調える。しかし殿内は、いちばん神様に近い部分は神宮の神職、すなわち禰宜さんたちや権禰宜の人たちがかかわって調えられる。このことによって建物は完全に整備されたかたちになり、そしてそこに神様がお鎮りになる。このような流れをとっているわけです。

あと一点だけ見ておきますと、先ほど日々の行事について、朝夕は外宮にあります御饌殿というところで食事を奉ると申し上げましたが、これの中では二十年に一度、殿内の神座が交換される。そういう意味では新しく神様の座をしつらえられるわけですが、毎年、神座には上下を覆う装束類や殿内の装束が更新される。旧暦九月の祭りに殿内の「神座」と書きましたが、正確にいうと、神座の上下を装う装束類ですが、それを飾られるということなんです。これは九月十八日に行われます。このように見ますと、二十年に一度の造宮によって社殿、そして神座も替えられるが、毎年、とくに神様のいまし場所を新しく飾るとい

行為が行われているわけです。

その殿内の問題と、先ほど申し忘れておりましたが、お白石を敷くという行事ですけれども、実はこれに関連しては古い記録がなくて、建久の年中行事の中に、御殿の下の掃除の分担諸役が出てきます（資料Ⅳ―④）。そこに白石という言葉が出てきて、その行事が行われた記録としては古いものです。いちばん床下、すなわち御殿の真下はとくに物忌の役割を担った子良と呼ばれる童女が母良の手扶けにより掃除をし、その周囲の大床は、高欄のついた下ですけれども、その部分の下は他の物忌職がし、そして、その外側を在地の刀禰であるとか、そういうものが白石を敷くつまり、内院のいちばんお祭りの中心にある心御柱のあたりだけは大物忌職が。こうした記事を丹念に読みますと、白石がもととあったのかどうか。そこはまさに祭りの祭場として存在しているわけですが、このようなことを申し上げましたのは、遷宮ごとに新しく祭場を調えられるとともに、毎年のお祭りの中でも祭場を飾るということが伊勢の神宮でも行われていたという問題です。

この関係性を見ていきますと、伊勢の場合、遷宮が、かつては神嘗祭と同じ日に遷御の儀が行われていたということとで、この神嘗祭と遷御の深いつながりをうかがうことのできる内容になっています。⑤の表（しつらえの概略）は急

いでつくったのでうまく整理できていないのですけれども、また機会があったらきちっとしたいと思います。私の申し上げたいことは三点、祭りの場を調えるという行為はかなり多様性があるんじゃないか。二点目は、祭りの場を調えるという観点から考えると、造宮は神様の居所を奉るそのこと自体も神祭りの行為じゃないかという点。三番目は、祭場を調える行為というのが祭儀の前提ではなく、祭祀そのものであり、祭りの時が徐々に近づいてきますと、そうしたものが中心の時に向かうに従って、空間的にも祭場を調える場面が限定されていく。そこにまさに神の発現というものが意識される。そういう行為としてとらえることができるんじゃないかと思うわけです。

あとのほうははしょってしまいました。そして、漠然とした話になったかもしれませんが、遷宮と造宮いう問題を更めて考えていただくきっかけになればと思います。ここですでに話を閉じさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（皇學館大学文学部教授）

「祭りの場」を調えることの意味―祭祀としての造営を考える― 講演資料

はじめに

①藤原宮の御井の歌―言ほぎの井泉

やすみしし わご大君 高照らす日の皇子 あらたへの  
井が原に 大御門 始めたまひて……高知るや天の御蔭 天  
知るや 日の御蔭の 水こそば 常にあらめ 御井の清水  
〔万葉集〕卷一、五二番

＊（やすみしし）わが大君の（高照らす）日の神の御子天皇が（あらたへの）藤井が原に宮殿を 造り始められ

……高く聳える 天つ神の御殿 天を蔽う 日の御子の御殿 この水こそは永遠であれ 御井の清水よ

＊藤原宮（新益京）持統天皇四年（六九〇）着工・八年遷都。着工・完成期間 天武五年（六七六）―慶雲元年（七〇四）？

②伊勢神宮「式年遷宮」のはじまりの伝え

天武天皇 立制

持統天皇 初回

＊『太神宮諸雜事記』（荒木田徳雄等・貞観十七年（八七五）任禰宜・延喜五年（九〇五）辞）

持統女天皇

即位四年庚子 太神宮御遷宮

同六年壬子、豊受太神宮御遷宮

（何東御宮地  
江始遷御也）

（六九〇年）造営  
（六九二年）造営

＊「式日遷宮」の語は二三世紀半ば伊勢神宮側で、「式年遷宮」の語は一四世紀半ば以降に、中央（朝廷・公卿

側）で用いられ始めた（牟禮仁著、一四三頁）

③井泉を飾る―メーデー行事

Dressing the wall/Wall-dressings（英国・民俗行事）

ムラの共同井泉などを花弁・草花・若葉で飾る。水の精や女神が宿っている。占いをしたり、その水に砂糖をいれて子どもたちが飲むという習慣も伝えられている。五月初の行事。メイポール（五月柱）。冬が去り夏を迎える行事。

I 平成二十五年という年

①出雲大社・伊勢神宮の遷宮の年

（1）出雲大社 平成の大遷宮 五月十日 「本殿遷座祭」肅行

（2）伊勢神宮 式年遷宮「遷御」日時 御治定二月二十五日発表

皇大神宮（内宮） 遷御 平成二十五年十月二日 午後八時

豊受大神宮（外宮） 遷御 平成二十五年十月五日 午後八時

②伊勢神宮における新宮のご造営と遷御の儀

○平成二十四年（日付は皇大神宮・豊受大神宮の順）

＊立柱祭（三月四日・六日）御形祭（三月四日・六日）

＊上棟祭（三月二十六日・二十八日）

＊檐付祭（五月二十三日・二十五日）

○平成二十五年

＊「お白石持ち」（七月末―九月初）

＊御戸祭（九月十三日・十五日）

＊御船代奉納式（九月十七日・十九日）

＊洗清（九月二十四日・二十六日）

＊心御柱奉建（九月二十五日・二十七日）

＊杵築祭（九月二十八日・二十九日）

＊後鎮祭（十月一日・四日）

遷御前日

＊御装束神宝誦合（十月一日・四日） 川原大祓（十月一日・四日）

遷御当日

＊御餉（十月二日・五日） 遷御

遷御翌日

＊大御饌・奉幣・古物渡・御神楽御饌・御神楽（十月三日・六日）

## II 祭りの行われる場

### ①神社本庁「神社祭式」規程

「当日早旦社殿を裝飾す」（例祭）

「当日早旦社殿並びに御旅所を裝飾し神具を弁備す」（神幸祭）

### ②社殿と祭場

（一）祭りの構成要素  
時・人・場

（二）「社殿」「神殿」「祭殿」「祠」

「古代神殿論」「批判論」（建築史学・文献史学・考古学）

↓研究動向「多様化、複雑化の一途」

（ア）神殿、祭殿、神社等の用語定義の問題

「神殿」＝神の常に住まうところ、もっぱら神の居場所として造作され機能した建造物。

「祭殿」＝人が祭りを行うところ、主として人間の祭場として造作され機能した建造物（今日の神社建築では拝殿）。

「神社」＝普遍化し広義な意にとらえる立場をとるか、例えば律令祭祀における官社制の成立に直結させ狭義にとらえるか（官社制の進展の中で普遍化する神祭りの為の常

設の施設ないしは建造物）

（イ）弥生、古墳時代以前の特殊もしくは大型の掘立柱建物跡を如何にとらえるか。

（ウ）「古代神殿論」への視座

神社建築の成立過程をどう考えるのか

「神籬・磐境→神殿のない神社→仮設の神殿→常設の神殿」（福山敏男）

＊錦田剛志論文参照

### ③遷宮と遷座（「神道大辞典」）

＊遷宮「神宮または神社の神座を遷し奉ること。遷座ともいふ。之を正遷宮と仮殿遷宮とに分かつ。↓遷座祭。」

＊遷座祭「神殿の改造または修繕を行はんとする時、及びその竣工の時、神儀を本殿より仮殿もしくは権殿へ、また仮殿もしくは権殿より本殿へ移し奉る祭儀。前者を仮殿遷座祭もしくは外（下）遷宮と称し、後者を本殿遷座祭または正（上）遷宮といふ。遷座祭には臨時及び定期の両者があり、定期的の遷座祭は、式年遷宮または式年遷座祭と称し、七年、十三年、二十年、三十年、五十年等の週期を以て祭儀を執行する。（中略）遷座祭の本儀は、時を定めて神霊のために宮殿を新にし、一段と神威の輝きを拝し奉らんとするにある。」

## III 祭りの「はじまり」と「祭場を調える」こと

### ①「祭り空間」の確定

＊石上神宮（奈良県天理市布留町）

十一月一日（陰暦……九月一日）「榜示浚神事」

布留郷境域八か所に川砂を盛り芝生を載せ櫛を立てる（古例・榜示杭を立て溝を浚える）

＊和伎座天乃夫岐売神社〈涌出宮〉（京都府木津川町平尾）

二月十五日（三日間）「居籠祭」の「森廻し」

氏子区域・境内要所での砂壇等への神立て

▲広い空間から祭り空間が徐々に限られてくる。

●「祭りの前提」なのか「祭りの一場面なのか」

②祭りの場を飾る

＊場の清浄化

＊建物の聖別化

③神座を調える

＊津島神社（愛知県津島市）

七月第四土・日（陰暦六月十五日）「神葭放（流）神事」↓

「御座替え」

＊佐太神社（島根県松江市鹿島町佐陀宮内）

九月二十四日「御座替神事」（同月二十五日例祭）

本社三殿、撰末社十五社（神酒・供物・巻莫蔭）

＊須我神社（島根県雲南市大東町須賀）

八月二十二日「莫蔭替祭」（九月二十八日例大祭）

▲神座の交換・新調

●神座を敷くことの意味は？

＊『儀式』踐祚大嘗祭儀上

八神殿者が片廂、葺以青草、内安竹棚「高四尺」、其上敷

席為神座、葺廻以葦、開東戸懸葦簾

八神殿は片廂と為、葺くに青草を以ちてせよ、内に竹棚を

安き、高さ四尺なれ、其の上に席を敷きて神座と為よ、葦

み廻らすに葦を以ちてし、東の戸を開き、葦の簾を懸けよ

④神奉斎施設の新調と建て替え

○「お社塔」立て

（民俗事例）（三重県多気郡明和町）佐田では、西出の集落の中央部の丁字路に小麦稈で屋根を葺いた高さ二層ほどの津島神社のお社塔が建てられている。孟宗竹の太い竹の丸太を柱としており、その柱の間も、壁も六〇センチ四方ぐらいで、床も壁も小麦稈で竹の骨で押さえている。毎年七月十三日に西出の男子のデアイで、お社塔の小麦稈の屋根を葺き替える。その年の忌服の人と女子は参加しない。なお、竹の柱は一年おきに新しくしている。代表者二人はこの七月十三日まで、津島神社（愛知恵）へ行ってお札を受けてくる。当日は、お社塔の葺き替えが終了したあと、集会所でお神酒をいただく。この日は全戸ヒマチをし、翌十四日は津島さんの祭典を行う。お社塔は、狭い道路上にあるので、交通の障害になるといいうので、明治のころ、移転することを相談したことがあって、神様にオミクジをあげたところ、移転するのはいけないとでたので、現在の位置にそのままに祀られている。このお社塔の横には、文政六年（一八三三）の常夜灯が建っている。（『明和町史』、二八七～八頁）

＊『日本書紀』神代上・第七段・正文

復見<sub>下</sub>天照大神当ニ新嘗一時、則陰放ニ尿於新宮。

（復天照大神の新嘗きこしめさむとする時を見て、則ち陰に新宮に放尿る）

＊『日本書紀』神代上・第七段・一書第二

及<sub>下</sub>至日神当ニ新嘗一時、素戔鳴尊則於ニ新宮御席之下、陰自送糞。

（日神の新嘗きこしめさむとする時に及至りて、素戔鳴尊、則ち新宮の御席の下に、陰に自ら送糞る。）

⑤ 祭りの場を調える範囲と内容

- (1) 殿舎の造営
  - (2) 御座を替える
  - (3) 御座を敷く
  - (4) 御神衣を奉る
  - (5) 社(祠)・壇を築く
  - (6) 柱を立てる
  - (7) 鳥居を立てる
  - (8) 御幣を立直す
  - (9) 注連縄を掛ける
  - (10) 砂を敷く。石を敷く
  - (11) その他・橋を架ける
- 多様な「遷宮」の形がありうるのではないか？

IV 神宮の祭りと遷宮

① 神宮の祭り

- (1) 日毎朝夕大御饌祭 (外宮・御饌殿)
  - (2) 年中恒例祭 (両宮)
- \* 三節祭 (六月・十二月の月次祭、陰暦九月の神嘗祭)
- (3) 遷宮 (両宮)

② 遷宮

- (1) 遷宮行事
- (ア) 心御柱奉献  
(イ) 正殿以下の造営  
(ウ) 御装束・神宝の献進  
(エ) 遷御

(オ) 由貴大御饌の供奉

(2) 内宮における豊受大神の「御座」の造替

『皇太神宮儀式帳』「供奉朝大御饌夕大御饌行事用物事」  
御贄清供奉、御橋老処<sup>高丈</sup>、石畳<sup>一</sup>処<sup>四</sup>  
太神宮正南御門、在<sup>二</sup>伊鈴御河<sup>一</sup>。当<sup>二</sup>此御門<sup>一</sup>、流<sup>二</sup>一俣也<sup>一</sup>。此  
中嶋<sup>神造</sup>奉<sup>二</sup>石畳<sup>一</sup>、常造宮使<sup>勞</sup>奉<sup>二</sup>。此止由氣太神<sup>乃</sup>入坐御坐  
也。御橋者、度会郡司、以黒木造奉。三節祭別、禁<sup>二</sup>封其  
橋<sup>一</sup>、人度不往還。則齋敬供奉、十六日夕大御饌、十七日朝大  
御饌<sup>爾</sup>、竝御箭作内人造奉御贄机<sup>爾</sup>、忌鍛冶内人造奉御贄小  
刀<sup>手立</sup>、志摩国神戸百姓供進鮮蛇螺等御贄<sup>手御机上</sup>備置<sup>乃</sup>、  
禰宜内人物忌等、御贄御前追<sup>乃</sup>、持立<sup>立</sup>、開<sup>二</sup>封御橋<sup>一</sup>、乃参度<sup>乃</sup>、  
止由氣太神<sup>乃</sup>御前跪侍<sup>乃</sup>、則御河<sup>清奉</sup>、御膳料理<sup>了</sup>、則如<sup>レ</sup>  
先持<sup>乃</sup>、御贄御前追<sup>乃</sup>、天照皇太神<sup>乃</sup>大御饌供奉。細子用物行  
事、月記具頭。

(3) 遷宮における「御飾」

殿舎の外側の金物などのしつらえ(エクステリア)部分(造宮使)  
殿舎内部のしつらえ(インテリア)部分(禰宜)

③ 御饌殿

『止由氣神宮儀式帳』

一二所太神朝御饌夕御饌供奉行事

御饌殿壹宇

用物 肆種

調絹式正<sup>及御饌井二所太神</sup> 調布捌端<sup>殿内天井壁代、二所太神及相殿神</sup>  
麻席参枚<sup>二所太神御座料、并相殿神御座料</sup> 麻簀参枚<sup>二所太神御饌料、并相殿神御饌料</sup>  
右件用物、太神宮司、年別九月祭所<sup>二</sup>宛奉<sup>一</sup>

『大神宮式』(御膳年料)

凡度会宮禰宜。内人等。依例供<sup>二</sup>進太神宮及度会宮朝夕御

膳。余宮不<sub>レ</sub>供。其御膳殿料所<sub>レ</sub>須絹二疋。布八端。東席三枚食單二端。食薦三枚。神宮司充<sub>レ</sub>之

「神宮の両正宮や別宮などでは、殿内の装飾を毎年新しく取り替えるということはない。それは二十年一度の、式年遷宮の時を原則とするのに対して、御饌殿では神座の「短御床二具」と御饌をのせる「御机二具」だけは二十年に一度新調する建前であるが、その神座の上下を装う装束類や殿内をかざる布帛類は毎年新調するのである。」（櫻井勝之進『伊勢神宮の祖型と展開』一〇九頁）

●九月の祭りに殿内「神座」・殿内の装束類は更新される。

#### ④年中恒例祭

『建久年中行事』

四月十一日

今日御内掃除、御殿之下<sub>ハ</sub>子良母良、大床下<sub>ハ</sub>物忌、白石<sub>ハ</sub>刀禰祝沙汰、散錢刀禰祝給、

四月十四日 風日祈宮祭礼

同日 神御衣神事勤行次第

今日内院南面番垣并玉串及四御門合三重<sub>ハ</sub>玉垣<sub>ハ</sub>御櫛<sub>ヲ</sub>奉<sub>レ</sub>差、是公候氏之勤也、又八重櫛<sub>ヲ</sub>奉<sub>レ</sub>差、其員數百廿七枚也、是山向内人之役也、又荒垣鳥居并二鳥居興玉櫛等同今日所<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>差也、荒祭神拝所ニ差櫛彼宮下部役也、又玉串櫛<sub>ハ</sub>山向内人之勤也、惣御櫛奉<sub>レ</sub>差事年中四箇度也、四月六月九月十二月御祭度也、但九月神御衣之時奉<sub>レ</sub>差櫛<sub>ヲ</sub>以十七日御祭者被<sub>レ</sub>行列也、近代二月祈年御祭<sub>ニ</sub>同所<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>差也

\*四月（神御衣祭）、六月・十二月（月次祭）、九月（神御衣祭・神嘗祭）

⑤しつらえの概略

| 時              | 祭・行事                 | 日毎朝夕 | 年中恒例 |    | 遷御 |    |
|----------------|----------------------|------|------|----|----|----|
|                |                      | 御饌殿  | 外宮   | 内宮 | 外宮 | 内宮 |
| 4月11日          | 殿内床下掃除               |      |      | ▲  |    |    |
| 4月14日          | 神御衣祭                 |      |      | ○▲ |    |    |
|                |                      |      |      |    |    |    |
| 6月15日<br>～17日  | 月次祭                  |      | ○    | ○▲ |    |    |
|                |                      |      |      |    |    |    |
| 9月14日          | 神御衣祭                 |      |      | ○▲ |    |    |
| 15日            | 外宮由貴夕大御饌             |      | ○    |    | ○  |    |
| 16日            | 外宮由貴朝大御饌<br>内宮由貴夕大御饌 |      | ○    | ○  | ○  | ○  |
| 17日            | 内宮由貴朝大御饌             |      |      | ○  |    | ○  |
| 18日            |                      | ▲    |      |    |    |    |
| 12月15日<br>～16日 | 月次祭                  |      | ○    | ○▲ |    |    |

## おわりに

- ①祭りの場を調える行為はさまざまであること。
- ②祭りの場を調える観点からすると造宮は神の居所の奉獻・神祭りの行為。
- ③祭場を調える行為は、祭儀の前提だけではなく祭祀そのものであり、それが祭儀の中心の時へ向かうに従い空間的にも集約されるのではないか。

## 【参照資料】

『太神宮諸雑事記』

〔天武天皇〕（在位：六七三～六八六年）

a 「朱鳥三年己丑九月廿日、依<sub>レ</sub>左大臣宣<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>勅、伊勢二所太神宮御神宝物等<sub>於</sub>差<sub>レ</sub>勅使<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>送畢。<sub>色目不宣旨状傳、</sub>二所太神宮之御遷宮事、廿年一度<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>遷御。宜<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>「長例」也<sub>云々</sub>。抑朱鳥三年以往之例、二所太神宮殿舎御門御垣等、宮司相待破損之時、奉<sub>レ</sub>修補<sub>レ</sub>之前例也。而依<sub>レ</sub>件宣旨、定<sub>レ</sub>遷宮之年限<sub>云々</sub>。又外院殿舎御倉、四面重々御垣等、所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>造加<sub>一</sub>也。

（朱鳥三年己丑……持統天皇二年戊子＝六八八年）

b 「白鳳十四年乙酉九月十日、始伊勢太神宮<sub>江</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>神宝廿一種<sub>一</sub>。亦中外院殿舎御倉、四面重々御門鳥居等、始被<sub>レ</sub>作加<sub>一</sub>。官符、二所太神宮殿舎御門垣等破損時、宮司令<sub>レ</sub>修補<sub>一</sub>承前例也。自<sub>レ</sub>今以後、新宮造替、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>遷御<sub>一</sub>宜<sub>レ</sub>「長例」者也<sub>一</sub>」

（白鳳十四年乙酉……乙酉（六八五）＝天武天皇一四年）

## 【引用・参照文献】

『神道大辞典』（昭和一四年、平凡社）

『萬葉集』（日本古典文学全集）（昭和四六年、小学館）

『皇太神宮儀式帳』『止由氣宮儀式帳』『太神宮諸雑事記』（神道大系神宮編）昭和五四年、同編纂会

『皇太神宮年中行事』（大神宮叢書 年中行事大成 前篇）（昭和一三年、神宮司庁）

\* 建久三年（一一九二）内宮権禰宣・荒木田忠仲編述、寛正五年（一四六四）荒木田氏経改訂補足）、『建久年中行事』などとも。

『訓読註釋儀式 踐祚大嘗祭儀』（平成二四年、皇學館大学神道研究所編）

『明和町史 史料編 第一卷—民俗・文化財—』（平成一七年）

櫻井勝之進『伊勢神宮』（昭和四四年、学生社、新版・平成一〇年）『伊勢神宮の祖型と展開』（平成三年、国書刊行会）

原田敏明『祭典遷宮』（『村の祭祀』昭和五〇年、中央公論社）

遷宮教学研修会『神宮式年遷宮の研究 第一輯』（昭和六三年、神道青年全国協議会）

牟禮仁『大嘗・遷宮と聖なるもの』（平成一二年、皇學館大学出版部）

錦田剛志『古代神殿論』をめぐる近年の研究動向（上）（下）——考古資料の解釈をめぐる——（『皇學館大学神道研究所所報』六三・六四号、平成一四年七月・一五年二月）

## 伊勢の御遷宮

中西正幸

ご紹介をいただきました中西でございます。限られた時間ですけれども、どうぞよろしくお願い申し上げます。今年、年明け春からですけれども、伊勢神宮、大層たくさんの方が見えまして、これから夏休みにかけてもまた人出が出て、十月には遷御ということで、さらに一層出るだろうというふうに期待しております。本年度の参拝者の見通しが一千五十万人ということですから、六月末にすでに六百五十万人ということですから、年末までその倍以上としても、一千万を軽く超えてしまうでしょう、一千三百万になるのではないでしょうか。前回の遷宮の時が九百万人ですから、それから考えてもまことに喜ばしい限りだと考えております。

まず話をさせていただく前に、式年遷宮ということを概

括的にまとめておこうという気がいたします。二十年に一遍、神宮では正宮に続いて、別宮というのが十四社あります。そのお宮を全部建て替えないといけないということで、宮大工が十万二千人ほど要します。延べ人数ですけれども、十万二千人の宮大工がトントんと神様のお住まいを造り上げていく。それが主たる目的ではありませんけれども、同時に御装束神宝ということ、中に納める装束、あるいは神宝というものも、千五百点ほどですけれども、全部調整する。そして、準備が整ったうえで、十月二日に内宮、五日に外宮ということで神遷しが行われるわけです。遷宮はだいたいそれで済むんですけれども、今年ではなくて来年、十二別宮が執行される予定となつて、したがって、今年と来年の事業であるということを理解していただかなけ

ればならないと思っております。

そして、その遷宮制度は、先ほども話がございましたけれども、天武天皇さまのご発案によりまして、持統天皇さまの御代はじめ、四年に内宮、六九〇年という年ですけれども、内宮、それから同じく六年、六九二年ですけれども、外宮がやられたということで、それ以来、今日まで、前後六十二回、千三百年の長きにわたって続けられてきた伝統的な祭儀であると位置づけることができるだろうと思います。

私の担当は発題ということですが、三つの点でお話をさせていただきたい。第一点は神嘗祭ということです。第二点は造営組織というか、機構がどうなっていたかという問題です。第三点は祭祀の面ということでお話をさせていただきます。

まず、櫻井先生もおっしゃいましたけれども、神嘗祭と遷宮というのは密接不可分な関係にあるということを第一にご理解いただきたい。その問題に入る前に、すこし話は振れますけれども、神宮のご造営用材を採る山、それは御杣山ということですが、一回の遷宮に膨大な森林資源が必要となるために、しだいしだいのうちに神宮の背後に広がる宮山にはだんだん材がなくなっていく。そして、いよいよ材を求めてというのが嘉元二年、一三〇四年という年

に、瀧原宮に近い江馬山に移ります。瀧原宮の近くは山が紀伊半島に続いて密集していますので、そこに材を求めた。そして、折から南北朝の騒乱がありまして、いろいろな事情がありますが、結局、三河の設楽山に移り、それから美濃の北山に移っていく。その美濃の北山に移ったのは康暦二年、一三八〇年です。ということは、伊勢神宮の近くから美濃山まで、材を求めて八十年という歳月しかたっていない。そういう意味で一三八〇年の美濃山というのがほぼ決定的になったという状況があります。

その森林資源の枯渇ということと同時に、遷宮というのが神嘗祭から離れていくという事態が起こります。神嘗祭の由貴の夕の大御饗、朝の大御饗ということで、夜二度にわたる大御饗が奉られる。そして、新穀がとりわけ朝、奉られるということが非常に重要なのですが、式年遷宮とは実は夕御饗と朝御饗のあいだに行われていた。というのは、三十四回までの遷宮記録の中にはつきりと書いてあります。したがって、遷宮が神嘗祭から離れたのは三十五回目からである。そして今日まで、再び両者は合体することなく、そのままになっているという状況である。ということです。遷宮祭を考えるとどこでも神嘗祭のことが必要になるというのは、そういう事情です。

神嘗祭は皇祖奉斎の厳儀といいまして、天照大神をお祭

りする最高のお祭りであるということで、年ごとに丁重にご奉仕されております。そして、二十年たったときにちょうど御殿、宝物を新たにして、より一層充実したかたちで神嘗祭の朝の大御饌を奉るというのが、本来のかたちであった。そういう意味では神嘗祭と分離してしまった遷宮ということはまことに残念だったということは、まづもって申し上げねばならぬことだろうと思います。

その後の遷宮はどうなったかという問題があります。神嘗祭と合体していて本来のかたちであるのですが、離れてしまったことよって、その後の三十七回、三十八回の記録をたどりますと、祭主さんは造宮使ということで、造宮事業の担当者、最高責任ということでおられるのですが、その方がいつもは京都に住んでおられる。お祭りのたびごとに伊勢にお見えになる。したがって、二月か六月、神嘗祭になれば九月ということになるんですけれども、二月か六月に遷宮が行われることが多いというのは、そういう事情もあります。したがって、第三十五回が行われたときは二月に遷宮を行っている。そういう意味では、そのあとで神嘗祭の早稲の大御饌を奉るという祭儀があればよりうるわしいかたちで大団円になるんですけれども、しり切れとんぼのかたちで終わっているというのが、遷宮記録を読んだときの私の素朴な感じですね。第一点は以上のとおり

です。

第二点は造宮組織と申しました。式年遷宮というのは、仮殿遷宮という臨時の修理を重ねる、そういう仮殿遷宮を幾度か行いました。だいたい中世から近世の初めになります。そのあいだには八十年間にわたり正殿すらないという状態もあるんだということは、当然、頭の中に置いておいていただきたい。天正十三年、一五八五年ですけれども、このときに遷宮の制度は再び復興したということです。ところが、長い伝統的な行事が百年以上途絶えていたということは、百年後に行った行事が見事な麗しいかたちで奉仕されることはまずないだろう、とうていそれは不可能だろうということ、両宮の遷宮制度は回復したけれども、両宮同年執行ということで、いままでは中一年を隔てて内宮、そして外宮という順番で行っていた遷宮が、両宮同年になっちゃった。それが天正遷宮で起こったわけです。そして、当然、一年の中で考えれば外宮先祭ということですから、外宮がお祭りが終わったあと、内宮のお祭りという手順で進むならば、式年遷宮も外宮先祭でやったかどうかという意見が起くるのは当然だと思うのですが、そういう意見が起きました。ただし、内宮が優先するという原則が朝廷から示されまして、それは沙汰止みになったと思っております。

正宮と宝殿が同一線上に並ぶ。きょうは内宮の図を持ってきたんですけど、内宮は正殿の後ろに宝殿という宝の蔵が並んでいるのですが、それが横一線になったという新たな造制、お宮の造り方という問題が起こってきたということです。ただ、徳川幕府というのが非常に安定した遷宮をやっていたので、前後十三回にわたるところの正遷宮が行われた。そして、山田奉行という奉行が造宮を担当します。総括責任でおりますけれども、とくに尾張藩と紀州藩に関しては材を供出せよということになります。尾張藩は先ほど申した木曾山があります。紀州藩については大杉谷という山がありますから、その両藩から切り出すという方式がとられた。そして、三重県は津に藤堂藩という藩があります。あるいは、近くの鳥羽というところに、稲垣藩があります。そこに対しては警護をしるということ、いろいろな警護に当たる。いずれにしても、幕府として最大限の努力をもらったと感謝するところです。

寛文遷宮、元禄遷宮という徳川式の遷宮ですけれども、たとえば内玉垣御門の御扉が付けられました。内玉垣というのは、皆さんご参拝になりますと、すぐ見えている奥のご門です。そのご門の扉がなかった。素通しという状態ではとてもたまらんといいことで、それを復活するとか、いろいろなことをやります。とりわけ享保遷宮がありました。

享保時代、木曾の山から材を選び出す手順がすっかり決まったということで、そのような成果もあって、十三回という遷宮が滞りなく行われていくことになります。

そして、時代は明治ですけれども、明治二十年、皆様の資料の中にも引いてありますが、造神宮使庁という国の組織ができたというのが非常に大きなことです。造神宮使というのは古代にもありました。古代は律令国家の中で臨時に置かれた役所だったわけですが、今度は内務省の中に常設機関としてそれを置いたというのが非常に重要なところですよ。いずれにしても、二十年に造神宮使庁という役所が置かれ、二十二年に第五十六回の式年遷宮を行うということですから、遷宮の二年前にこの役所が置かれた。そして、どうにかこうにか遷宮が終わった。

皆さんは今年は遷宮だと思っておられますけれども、小さなお宮まで建て替えるためにこれから五、六年歳月を要します。したがって、遷宮というのは式年で終わるのではなくて、式年で始まって、五、六年かかって百二十五社のうちの半分だけやれるということですから、一回の遷宮というのは膨大な歳月のかかることである。したがって、二十二年の遷宮が終わって二十七、八年まで造神宮使庁は遷宮のことに取り掛かりの状態です。

ところが、資料にも書きましたけれども、三十一年に御

本殿が丸焼けになるという事態が起こったのです。式年遷宮によってせっかく御殿が新たになったのに、三十一年五月、御本殿丸焼けということですから、本当に驚くべき事態です。そういうことで、造神宮使庁というのはできてすぐにいるいろいろなことを始めたかったのだけれども、どうも始められなかった。何をやりたかったのか。技術畑を充実させて、宝物をもう一回全部根本的に洗い直すという作業、古儀調査。古い決まりを調べて、御物あるいは御料の上に反映させようという目論見があったわけです。大正九年に始まりまして、本格的にやりはじめたら、あに図らんや、関東大震災に襲われまして、全部資料が焼けてしまうという事態もあります。そういうこともありまして、態勢を立て直すのにお日がかかったのですが、昭和四年に遷宮が行われました。昭和四年の遷宮に、宝物については古儀調査を経た上で、御料が全部徹底して直すことができたということになっております。したがって、今日も昭和四年の御料については格別重要なものとして珍重している。神宮の宝物の展覧会がありました。昭和四年の調製ということを確認していただいて、その御料を見ていただくと、ひとしお感慨が起こると思っております。

第三番目は祭儀の問題になります。お手元の資料にも書いてあると思いますが、遷宮祭の構成ということで、遷宮

のお祭りを今日かたちづくっている祭りの個々を検討していけばどうなるかということで、そこに書いております。上の段に遷御、由貴大御饌、奉幣、御遊という神楽に当たる部分ということになります。三十四回に及ぶ遷宮はこういう感じで行われていました。遷御が行われて、神遷しが終わり、神座も新たになった神様に対して、早稲の大御饌を奉る。それが神嘗祭です。という意味で、由貴大御饌ということが早速なされた。そして、その翌日、奉幣ということで朝廷から使いが遣わされまして、神宮に対してお宝物を差し上げる。幣帛を奉る。そして、その夜、御遊ということでは神主が歌い舞うということをやります。

ところが、遷御がひとりだけ飛んでしまった。三十五回以降はそういうことです。そして、他の祭り、月次祭とか祈年祭とか、そういうお祭りとやや時を同じくしてやったということになります。しかしながら、神嘗祭と離れてしまった遷宮は、どうにも祭りとしての感覚が合わない。神主というものはやはり祭りのセンスというものがありますから、大御饌、それから奉幣、さらに御神楽という三つのものを付け足しましょうということになったわけです。

さすがに、できましたところの官庁である造神宮使庁がいちばん最初に手がけましたけれども、明治二十二年に御神楽という儀式を始めることになります。もちろん、それ

までも奉幣ということ、神様に幣帛を奉るという行事は中世の終わり頃の永祿六年に始まる。そして大御饌については、いちばんこれが祭りの醍醐味のあるところなんですから、昭和四年に初めて執行されました。したがって現在の遷宮は、遷御が終わると大御饌、奉幣、御神楽という順序で祭りが進んでいく。そういうかたちの完成は、すくなくとも昭和四年までかかっていますよということです。そのへんが一点ひっかかることです。

こんにち遷宮は十月二日と五日と申し上げました。暦の改暦が明治六年にありまして、暦が変わったわけです。太陽暦ということになりました。そういう意味で神宮の神嘗祭も一か月送らせましょう、したがって、九月十七日に行っていた神嘗祭を十月の十七日に行いましょう、外宮は十六日、内宮は十七日ということに決まっております。したがって、好意的に考えれば、遷宮が終わって、あいだは十日かそれ以上あきますけれども、十月の二日に内宮が終わって、十七日の神嘗祭まで十日以上の日がありますけれども、そういう意味でだんだん近づいてきた。少なくとも明治二十二年から十月になったんです。それまでは九月ということ、元祿遷宮以降、九月にやってきました。そういう歴史をあれこれ考えますと、遷宮で事が終わったんじゃない。その年の神嘗祭が終わって全部が終わりますよという

ことです。から、遷宮というものの解釈に神嘗祭ということはどうしても中心として置いておいていただきたいと思っております。

最後のところですが、遷宮の御列の問題があります。神様を絹のバールで覆うということはご承知のとおりです。絹垣と書いて「きんがゐ」と読みます。絹垣の中に神様が秘められておでましになる。そこに明治二十二年と昭和四年の二つが比喩であるはず。明治二十二年の御列を見ておきますと、前陣・掌典・奉遷使・絹垣・祭主・宮司・後陣というかたちになっています。つまり、絹垣がご神体で、その前に奉遷使。これは皇室から遣わされた。神宮の祭主ではなくて、それなりの使いが遣わされる。勅使と呼ぶべきなんでしょうけれども、記録の中には奉遷使と出てきますので、奉遷使と使いました。そして、ご神体の後ろを祭主さんがお歩きになる。そして、その後ろに宮司がつくというかたちです。昭和四年はそうではなくて、勅使という名称が正式に使われました。そして、絹垣が来て、その後ろに祭主さんがおつきになる。宮司はどこへ行ったのかと思うと、絹垣の中に入ってしまったというかたちです。いずれにしても、遷御の儀というものは神宮がやるものではなくて、天皇がやるという姿勢が前面に出ているということ、これを理解してください。昭和四年のかたちは今日のか

たちに引き継がれているということです。

なお、参考までに申し上げておきますが、江戸期の元禄年間の遷宮記を見ますと、祭主さんが前に立ち、そして絹垣が来て、その後ろに宮司がつくということですから、そのかたちからするならば、明治以降はやはり天皇祭祀ということを頭に十分いただいての理解であると思います。そして、御列が進発するについて、合図が下される。その合図を鶏鳴、鳥の鳴き声というのはそれです。鶏鳴三声を若い神主がやりますけれども、それは神話の昔、天の岩戸の神祭りの状況をなぞったものだと思います。今日はそれを伝えて鳴くんですけれども、この当時は冠を叩いて鳴いたというような、所作に若干の違いがあります。それから、奉遷使が出御三声を申される。「出御、出御、出御」ということで御列が動くということです。この出御三声はどうも明治二十二年の遷宮からではないか。それ以前は奉遷使が警蹕をかけて御列が動いておりますから、そういう意味ではわりあい新しいものではないのかなという印象をもっております。

以上、三点を申し上げて発題に代えさせていただきますと思います。以上でございます。

(國學院大學神道文化学部教授)

## 「伊勢の御遷宮」 発題資料

### 一、大神嘗祭

御杣山は当初、神宮背後の宮山であったが、森林資源の枯渇は覆うべくもなく、古代末期の寛仁三年（一〇九二）遷宮に際して、志摩国答志郡に求めた。さらに嘉元二年（一一三〇）に瀧原宮に近い江馬山から、南北朝の騒乱があり、暦応二年（一三三九）に三河国設楽山、康暦二年（一三三九）には美濃の北山に及んでいった。

こうした御用材を他国他山に求める一方、祭祀理念の古儀が見失われようとしていた。本来、神嘗祭の由貴大御饌の間に遷御を行ない、それを「大神嘗祭」と意義づけられよう。『元亨三年内宮遷宮記』では、古殿から新殿へと神霊をお遷しして、新穀を供進するところに深い意味が込められている。

神霊が新殿の新たな神座に鎮まり、その上で新穀の御饌をお供えする。ここに神嘗祭の古伝承のまにまに、収穫と鎮座を祝いつつ、「神嘗正月」さながら、新たな正月を迎えるという祭祀理念が明らかとなろう。

諸国の騒乱に加えて殿舎未作や神宝遅延など、様々な理由から遷宮と神嘗祭とが離れてしまつて、竟にふたたび出会うことがなかった。

① 文永三年（一二六六）九月十六日、遷御のあと、宮司・禰宜が勤行文に加署。禰宜たちが装束を直さず、新宮御座にまいり由貴御饌を供進した。因みに十一年正月に日本遠征を下命し、五月初めには高麗の船舶九百艘の建造を終えていた。

無為無事<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>遷御<sub>一</sub>、其後著<sub>二</sub>例所石壺<sub>一</sub>、御鑰櫃之後、使

者自<sub>二</sub>南御門<sub>一</sub>退出、禰宜者自<sub>二</sub>西御門<sub>一</sub>退出云々、其後被<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>一殿<sub>一</sub>、使<sub>ハ</sub>北南面、宮司<sub>ハ</sub>南東上北面、禰宜<sub>ハ</sub>東北上西面、鋪設各長筵宮半帖也、件<sub>レ</sub>勤行文於<sub>二</sub>本宮公文所<sub>一</sub>任<sub>二</sub>例書儲<sub>一</sub>之云々、今夜由貴<sub>レ</sub>御饌、遷御供奉之間、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>宿館退出<sub>一</sub>、一二三四八禰宜、自<sub>二</sub>一殿<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>直<sub>二</sub>装束<sub>一</sub>、即<sub>ニ</sub>參<sub>二</sub>御饌所<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>畢

② 元亨三年（一一三三）九月十六日の渡御は、御巫内人の鶏鳴があり出御、前陣・御使に続いて絹垣が進み、後陣が続いて新宮に到る。神宝を殿内の左右に立てて、神霊を鎮めまつり、御戸を閉ざした。神嘗祭と連動する遷御の儀が執行された最後の御儀となったものである。

その後の模様を、後村上天皇の貞治三年（一一六四）二月十六日に執行された第三十六回の内宮遷宮に伺つてみたい。『貞治三年内宮遷宮記』によれば、十六日戌刻、御出行事とみえる。前陣・御使・絹垣、さらに後陣の御鉾・御楯・御弓を捧げて厳かに新宮に渡御した。祈年祭の歳月にあたり、祭主の京都から参向があることから、遷御が行われたものと考えられる。

### 二、造神宮使庁

ようやく天正十三年（一五八五）、両宮の遷宮制が回復された。両宮が同年執行となり、正殿と宝殿が一直線に並ぶなど、課題が多く残った。泰平の徳川幕政下、山田奉行が造宮奉行を兼任し、造宮料三万石を負担させ、尾張・紀伊両藩に御用材を伐り出させて、殿舎・諸祭・職掌も次第に回復していった。

明治十年過ぎ、遷宮奉行など旧職掌が主軸となつて遷宮準備が開始されたが、二十年末に勅令をもつて、内務省の管理に属する造神宮使庁の官制が公布された。

新政府の威信をかけた二十二年の御儀が遂行されたが、安堵の暇もなく三十一年五月、内宮の正殿が炎上する由々しい事態となった。三十三年の臨時遷宮に向けて、当面の急務に忙殺されることになったが、同時進行のかたちで技術系統を独立させ、御装束・神宝の再吟味に努めたが、四十二年遷宮には為すところが無かった。

大正九年の古儀調査会が発足の運びになり、関東大震災の被害を被ったが、七年間にわたる成果を『御装束神宝類聚調書』にとり纏め、昭和四年遷宮にむけて調進御料に、可能なかぎり反映させることが出来たのである。

第五十六回遷宮が間近となった二十年十二月二十五日、勅令第六十八号をもって造神宮使庁が公布された。造神宮使庁とは内務大臣の監督下、殿舎造営や御装束・神宝調進など、遷宮事業のすべてを掌るため、内務省内に設置された国家的な常設機関で、ここに王朝の盛時にまさる偉観をみせた。

第一条 造神宮使庁ハ内務大臣ノ管理ニ属シ、新宮造営及神宝装束調進ノ事ヲ主掌ス

第二条 造神宮使庁ノ職員ヲ置ク

造神宮使 造神宮副使 造神宮主事 造神宮属

第三条 造神宮使ハ一人勅任トス。神宮祭主ヲ以テ之ニ充ツ。

内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ、庁中ノ事務ヲ管理ス

第四条 造神宮使ハ所属ノ官吏ヲ統督シ、奏任官ノ進退ハ内務大臣ニ具状シ、判任官ハ之ヲ専行ス

第五条 造神宮副使ハ一人奏任トス。内務省杜事務局長ヲ以テ之ニ充ツ。造神宮使ノ事務ヲ佐ケ、造神宮使事故アルトキ

ハ、内務大臣ノ命ヲ受ケ其事務ヲ代理ス

### 三、遷宮祭の構成

遷宮は「神嘗祭の祭場づくり」の意味をもち、現行祭儀では次のように奉仕されている

遷御 ↓ 遷御

由貴大御饌 大御饌 昭和四年遷宮

奉幣 奉幣 永祿六年（一五六三） 東宝殿奉納

御遊 御神楽 明治二十二年 宮内省楽人

まず永祿六年（一五六三）の外宮遷宮に際して、正親町天皇の祈謝宣命が奏上された。天正以来、これが奉幣の先例となって毎度慣例化された。しかも造神宮使庁が明治二十二年に遷宮を実施したが、御神楽および秘曲が宮内省楽人によって奉奏された。さらに昭和四年の御儀に際し、神宮司庁告示をもって遷御・奉幣の遷宮祭に、新たに大御饌を加えた三儀を大祭として奉仕することになった。

① 御饌供進の儀について、二十二年五月三十日付で宮司・鹿島

則文から宮内大臣・松方正義に、次の「御神楽奏行前神饌奉奠ニ付上申」を提出して実現方を要請した。

古来、皇大神宮ハ九月十六日、豊受大神宮ハ九月十五日ヲ

以式月式日トシテ遷御之御例ニテ、其当日ハ即神嘗祭由貴

御饌ニ相当リ候処、中世以降遷御ハ神嘗祭数日前九月月上旬

ニ御執行ト相成候故、遷御後神饌奉奠無之様相成候

歴史的な事情から御儀遅滞により、神嘗祭と関係なく遷御が

執行されてきたため、遷御後に御饌を奉奠したいと要請した。

その結果、願いの筋が聴許されたと、孫福弘孚著『樸陰記』九月三日条にみえる。

今夕御饌供進ニ相成、是ハ古ヘ由貴ノ夜遷御アリ。古殿ニ

テ夕御饌ヲ供シ新殿ニテ朝御饌ヲ供シタルヲ以テ、此度ハ新殿之御饌ヲ奉ル、従前ハ無之事。又神楽ヲ奉スル事ト成ル、夜半迄相済不<sub>レ</sub>申長キ事也

つまり遷御後、まず「新殿之儀」として今日では、神楽奉奏に先だつて「御神楽御饌」と称する御饌が供えられているが、二十二年の次第では見当たらない。したがつて御饌供進に就いて神楽が奏せられた。ところが昭和四年度より午前八時に御饌、午前十時より奉幣、午後五時より御神楽御饌、さらに御神楽が夜半まで奉仕されて、その違いが明白であろう。現行もこれに基づいている。

② 遷幸の順番について、どのような変遷があるのか。

明治二十二年 前陣・掌典・奉遷使・絹垣・祭主・宮司・後陣

昭和 四年 前陣・掌典・勅使・絹垣・祭主・後陣  
御列の進発にあたり、宮掌の高唱する鶏鳴三声は、天照大御神の岩戸開きという神話的な「神霊」と、奉遷使の出御三声が、皇位の源泉という制度的な「神器」と、その二面性を示している。

純白の絹垣に秘められた「御」、つまり神体に前後して互いに守護しあうように、近世では祭主が前、宮司が後であったが、明治二十二年の遷御に際して奉遷使が前行し、祭主・宮司が従った。四十二年度には祭主のみが供奉し、宮司は禰宜たちと一緒に奉戴するように変化している。

# 出雲大社の大遷宮

——寛文度の造営と祭祀——

西岡 和彦

出雲大社について発題させていただきます。私は國學院大學の西岡と申します。私には「寛文度の造営と祭祀」で発題してほしいということがあります。寛文度といいますのは、江戸時代の前期です。なぜ寛文度なのかと申しますと、出雲大社のいまの姿かたちが古代までさかのぼれるかといったら、まずありません。いまの姿かたちができたのは寛文度です。ですので、私どもが知っている出雲大社の姿かたちになった寛文度とはどういうご遷宮だったのかということをお話したいと思います。

出雲大社のご祭神は、現在は大国主大神さまです。『古事記』は日本の最も古い古典の一つです。本居宣長さんという非常に有名な国学者が『古事記』が神道のテキストには最もふさわしいということで、それが多くの神社界で受

け入れられたことから、『古事記』にならって祭神名が変わりました。ただし、レジメやパワーポイントで画面に映し出した掲示にある祭神名大己貴神とは『日本書紀』にならったものです(資料②)。本居宣長さんはまだ寛文度にはいらつしゃいせん。江戸時代の終わりの頃に出てきた方です。寛文度は江戸時代の初めの頃のことですから、神道のテキストは『日本書紀』ですので、ご祭神も『日本書紀』にならって大己貴神とされていたのです。

神職の組織は国造、「こくそう」と読みならしてありますが、その方がトップにいます。その下に、いまで言えはおそらく権宮司クラスと言っているくらいの上官(じょうがん)という国造の代わりを務める方がいます。国造さんは神様ですので、祭祀以外の俗的な働きは原則いたしません

ん。それで、この俗的な働きはこの上官という方が国造の代わりをいたしました。

出雲国造という神代から続く家は、南北朝時代に千家家と北島家という二つの家に分かれたので、出雲大社のご本殿を、一月と三月と五月という奇数月には千家国造が中心になって、その傘下の上官以下がやる。これは江戸時代、明治四年までやっていました。一方、偶数月は北島国造が中心に以下その上官らが本殿のお祭りを行っていた。閏月というのが近世までありましたが、閏月は前半が千家国造、後半は北島国造が行いました。そのため国造がちょっと病気になるって、この月お務めができないというときは、たとえば一月に千家国造がちょっと体調が悪いというところでお祭りに出られないとなれば、北島国造が代わりにやりますよ、ということにはならなかった。千家国造の抱え月は必ず千家国造が行うことです。その代わりは別火という特別の家がありまして、北島国造が不調のときも千家国造が代わりに行う、ということではなくて、これも別火が行う。別火は常にこの両国造の仲間という立場におりました。

これは祭祀を仲介する別火の場合ですが、出雲大社も一般の神社と同様神仏習合しておりましたから、いろいろ事務的な手続きは本願職というお坊さん、社僧がやっており

ました。この方が中心になっていろいろな事務処理をやっていたわけです。ただ、江戸時代のこの寛文のご造営の交渉期間中に、本願が幕府から追放を受けましたので、それ以降は本願がやっていただけを、今度は上官という家が代わりに行うようになりました。とくに両国造家には各々社奉行がいまして、千家方が長谷（ながたに）上官、北島方が佐草（さくさ）という上官がそれぞれ務めました。

当時、出雲大社領は二千七百石ぐらいです。太閤検地で三千石以上持っていたから、これだけしかないわけです。そのうち両国造に各一千石が配分されます。その中から上官以下の配分があるわけですが、上官はだいたい一人頭三十石になっています。別火と本願は各国造の傘下に入りませんので、別に独立して各五十石が配分されました。

神仏習合時代は神社のお祭りで使われる祭田領が約三百三十六石で、神仏習合しますから、もちろん仏事もありますので、灯明田領で三十石、さらに本願がいました神宮寺領に十三石ということで、それぞれ神事と仏事の予算がちゃんと仕組まれていました。

出雲大社は寛文のご造営を寛文七年三月晦日に行いました（資料③）。これを出雲大社では正殿式造営遷宮と言っております。それまでの遷宮は仮殿式ということで、正殿式

というのはいまの規模の建物。それ以前の出雲大社の建物というのは、前の慶長度が豊臣秀頼が願主になって建てたのですが、それは高さが二十メートルぐらいでした。その前となると、さらに低くて十四メートルぐらいの時もあって、われわれはピラミッドみたいなものを想像しています。そういうのはるか大昔のことでありました。それを四代將軍徳川家綱が願主になって出雲大社をなんとか立派なものにしようということになったわけです。

徳川家綱というのは、お父さんが徳川家光ですが、家光の嫡男が生まれなかったので、乳母の春日局がたいへん心配しました。なんとか嫡男が生まれて三代將軍から四代將軍に徳川將軍の栄光がずっと続いていくようにということをお願いしていたわけです。その時に春日局と知り合いの月照院という女の方が、それならば出雲大社にお願いしようということになった。この月照院が松江藩の初代藩主松平直政さんのお母さんなんです。そこで松平直政さんからじきにそういう命令が出雲大社に行きました。これは機密事項ですから、内々で出雲の国造が本殿の中でずっとご祈禱し続けるということをやったわけです。子宝成就のご祈願を一ヶ月間ずっとやったわけです。

そういうことをいたしましたと幕府に報告して、その十月十日後に徳川家綱がお生まれになりましたので、徳川宗

家では、家綱さんは出雲大社に非常にご縁のある方だと、宗家とか松平さんとか、そういう親戚筋の方はみんな知っていたわけです。そして、今度は徳川家綱さんが願主になって、出雲大社を建て替えようということになったので、松平直政さんはなんとしてもこの徳川家綱さんの記念物になるようなものをつくりたいということをつくったのが、あの出雲大社であつたわけです。ですから、いまの出雲大社のようにあれほどの立派な建物になったのは、松平直政さんが徳川家綱さんのモニュメントとして永遠に残していくというつもりで出雲大社を建てようとしたからです。

この寛文度の造営遷宮の特徴は、本殿を含む境内を大改造したことです(資料④)。大改造しないと、永久に残るような建物は造れませんから、本殿を含む境内を全部造り替えたわけです。

本殿を含む境内を大改造したのは、どんなことをしたかといえますと、一つは本殿を正殿式にした。われわれがいま現在見ています出雲大社のご本殿と同じような規模にしたわけです。

そして、本殿を白木にしました。従来出雲大社は朱塗りでありました。だから、お稲荷さんみたいな建物ですね。それを白木にしようということで白木にしました。

また、本殿の装飾を極力避けて、簡略なものにしようと

しました。幕府としては、当時の流行のいろいろな組物をやらせてもらいたい、ということで提案してきたんですけれども、出雲大社側としてはいまの出雲大社のご本殿のように非常にシンプルな建物にしてほしいということをお願いします。これは先ほどの伊勢神宮の話にありましたが、伊勢神宮を非常に意識しているわけです。

さらに本殿を八雲山の麓まで引き下げました。実は八雲山の麓には先ほどの北島国造のお屋敷があったんです。そのため北島国造のお屋敷をどこかに移さないとそれはできません。なぜ移さねばならないかというと、本殿を永遠に残しておくためには火事があつては困ります。ご本殿の裏で生活が行われていれば、必ず出火という危険性が出てきます。北島国造邸で出火が起これば、永遠に残そうと思つたご本殿にまで飛火して燃えてしまうということにもなりかねません。永遠に残すためには、まず北島国造邸に境内から出ていただくということにしたわけです。そんなことができるのは当時の権力者だけです。千家さんが「北島さん、どいてください」と言つたつて、絶対そんなことはかなわない。これは当時の権力者が有無をいわずやつた結果なのです。

そして、境内地を均しました。出雲大社の境内の両側にはいまでも川が流れておりますけれども、あの川は暴れ川

なんです。ですから、大雨が降ると鉄砲水が出て土石流を流すので、その土石流の跡で出雲大社の境内は当時凸凹だった。いまでも出雲大社の周りをちゃんと見ていただければおわかりのとおり、かなり傾斜しております。平らではありません。そういう凸凹な状態をとにかく均さなければちゃんとしたものを建てられませんでした、均すということをやりました。

そして、東側の吉野川と西側の素鷲川を石垣で護岸した。要するに、洪水を起こさせない。洪水になつて本殿が水浸しになれば、元も子もありませんので、そういう護岸工事をしたわけです。

さらに、護岸だけでは心配ですので、出雲大社に垣根を設けた。石垣の垣根を三重に巡らせて、さらに垣根ごとに築山を設けて、本殿を非常に高いところに鎮座させるということをしたわけです。

レジメや画面上に映した図は幕府側が考案した本殿の設計図です(資料⑤)。しかし、この図には出雲大社の大社造りの特徴である屋根を支える宇豆柱がついてないんです。宇豆柱のついていない大社造りを幕府側は考案してきた。それを出雲大社は丁重に断りました。

次の写真は現在残っている寛文度の時につくった護岸した跡です(資料⑥)。石垣が見えるのは、北島国造邸の石垣

の堀です。真ん中が吉野川。吉野川の川底に大きな石があるのがわかりだと思えます。こういうのが流れてきたわけです。そして、左側に出雲大社の石垣の荒垣が見えます。次の写真は出雲大社の本殿ですが、本殿の近くに玉垣といて石垣で築いた垣根が巡らされております（資料⑦）。写真は、瑞垣内から撮っておりますので、玉垣内が瑞垣内よりも高くなっているのがおわかりになると思います。以上から、できるだけ洪水からご本殿を守ろうとしていたことがわかります。

もう一つ大きな特徴は神仏分離であります（資料⑧）。幕府や藩との造営交渉の場から本願を外しました。もともと松平直政さんが出雲大社の歴史をよく知っているものを江戸幕府との交渉人にあててほしいということもありまして、本願さんでは松平直政さんが思っているような交渉はできないと思ったので遠ざけたのです。それが原因で神職主導の造営が行われるようになった。いままでは坊さんが主導で造営交渉などをやっていたのですが、松平直政さんの意向もあって神職さんが主導で行った。しかし、本願さんとしては非常に面白くないので、幕府に直訴するわけですね。なんとかしてほしいということで直訴したのですが、その直訴がかえって本願を免職して追放に処せられるようなことになってしまったのです。

本願免職後、境内地から仏教施設を取り除いた。境内には神宮寺、天徳寺、所讃寺、三重塔、梵鐘、護摩堂などがありましたから、出雲大社というのはまさにお寺のような状態であったわけですね。さらに年頭の御礼の將軍さんに直接お会いしてご挨拶するというのを、いままでは本願さんがやっていたのですが、上官の神職が代わりに行うようになった。いまだに出雲大社が將軍さんにお会いする順番は、最初にお会いするのはもちろん伊勢神宮の神主さんです。伊勢神宮の神主さんが筆頭にご挨拶して、その次に神宮とともに二所宗廟といわれた石清水八幡宮の方が挨拶する。その次は石清水八幡宮が男山に遷座する前にあった離宮八幡の方が將軍さんにご挨拶する。その離宮八幡の次が出雲大社なんです。

それを見た上官さんはびっくりしました。彼らは伊勢の次が出雲だという意識が強いですから、幕府は一体どうなっているんだと、伊勢の次が石清水とはどういうことだということ、すぐに訴えまして、今度から伊勢の次は出雲に、ということでお願います。そうすると、幕府側としては先例主義ですから、そういうわけにもいかないというので、特別に日を設け、その日は筆頭に出雲大社の上官が將軍さんにご挨拶できるようにさせることで対応したわけですね。

神仏分離ですから、東西八町・南北六町の間を神域にして、神道の純粋性を確保した。出雲大社の純神道化というのはやはり伊勢神宮を意識しております。「古來僧尼の瑞籬内に入るを禁ず故、社域外東西八町、南北六町之間、寺院無く、最も別当社僧も無し」ということで、自分たちの出雲大社というのはこんな神社ですよ、瑞垣内にお坊さんや尼さんが立ち入ることを許さないお宮です、さらに、境内から東西八町、南北六町の間にもお寺も別当も社僧もいないと。別当というのは鰐淵寺のお坊さんがやっていましたし、社僧というのは本願でありますけれども、そういうのはもともとなかったんですよ、ということを出雲大社は幕府に言っております。

この絵図が先ほど来の神仏習合していた時代の出雲大社の境内図であります（資料⑨）。カラーですので、すぐわかりただけだと思いますが、本殿が朱塗りである。楼門を真ん中に左右に塀が本殿の周りを囲んでいる。これは現在の瑞垣ですね。ですから、もともとは瑞垣しかなかった。そして、瑞垣の外がお寺なんです。ですから、瑞垣の中は神社、瑞垣の外はお寺ということで、瑞垣内だけはお坊さんはいれさせない、とにかくそれだけは守らないといけないという気持ちで、おそらくこういう垣根がつくられたのだらうということがわかります。周りにはいろいろな建物

がありますし、本殿の後ろに大きなお屋敷がありますが、これが北島国造のお屋敷だった。松平直政さんは出雲大社のご本殿を家綱さんのモニュメントにしたいという気持ちがありますから、どうしてもこのお屋敷を移動させたいということ、移動させたわけです。

これは出雲大社の隣にある博物館にある模型です（資料⑩）。これは先ほどの絵をそのまま模型化したものです。こういう状態であったということです。

この航空写真が現在の出雲大社です（資料⑪）。ご本殿の近くに一重の垣根、玉垣ですね。そして、楼門を真ん中に垣根がある。これが先ほど見た瑞垣です。ですから、寛文のご造営というのは瑞垣よりもさらに中に垣根を設けた。玉垣というのは設けた。そして、さらに両側の川から水が溢れ出ないように両側にも荒垣という垣根を設けて、出雲大社を風水害から守ろうとしたわけです。

寛文度の造営の「本殿遷座祭」までの祭祀の流れですが（資料⑫・⑬）、寛文六年に心御柱立というのが行われ、寛文七年に幕府側から時のいいときにお祭りをしなさいという指令が来ましたので、それに応じて三月八日に飯殿と正殿をつなぐ浮橋を設けます。そして、両国造、上官、神輿が社籠する。三月二十六日に御棟上が行われまして、二十七日に湯立の神事。いま現在はやっておりますが、湯

立の神事が行われます。そして三月三十日、遷宮当日。こういう流れで出雲大社内でお祭りが行われました。

図録『平成の大遷宮 出雲大社展』に本殿の鎮座地の変遷図というのがありまして、わかりやすいので、そのまま抜粋させていただきました(資料⑭)。慶長度のご本殿から寛文度のご本殿ということで、かなり後ろにご本殿を遷したことがおわかりになると思います。この慶長度のご本殿から寛文度のご本殿の間に浮橋をかけたのです。今回のご遷宮もそうでしたし、前回もそうだったと思いますが、いまは浮橋は設けておりません。仮遷宮では神輿が本殿から下りまして、八足門のある瑞垣から出て、仮殿へ遷る。正遷宮では仮殿からその逆のルートでご本殿に還っていきます。

当時は浮橋ということで、おそらく地面に大事な神輿をつけてはいけないということもあったのだろうと思いますし、また、両国造が二人神輿の前後に並ぶわけです。国造さんというのとはもともと地面を歩く方ではないんです。国造さんというお方はお屋敷から籠に乗ってやってくる方ですから、地面を歩くことはありませんので、そんなお方が地面を歩くというのはふさわしくないのです、おそらく浮橋が設けられたのだらうと思います。

この写真は明治のご遷宮です(資料⑮)。ご本殿と素鷲社

との間に浮橋をかけて、遷御が行われたわけです。

この写真でご本殿の縁側に白い御神輿が見えますでしょうか。この御神輿に乗って、この新しいご本殿にお遷りしたのです。

時間がちょうどまいりましたので、このあたりで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(國學院大學神道文化学部准教授)

①

明治聖徳記念学会 公開シンポジウム  
「神社の造営と祭祀—伊勢と出雲—」

## 出雲大社の大遷宮

—寛文度の造営と祭祀—

発題者 西岡和彦  
(國學院大學神道文化学部 准教授)  
平成25年7月6日13:30～  
於國學院大學常盤松ホール

②

### 近世の出雲大社について

#### 祭神

大己貴神

#### 神職組織

国造—上官(国造名代を担う上級神職八家)—中堅・下級神職

両国造家相互で本殿祭祀を執行

千家国造執行—奇数月

北島国造執行—偶数月

閏月—前半千家国造、後半北島国造が執行

国造が不豫の時は、両家の仲人別火職が祭祀を代行。  
事務処理は本願職が両家の仲人として代行。

本願免職後は、両家の上官が代行。

両家の社奉行は、長谷上官と佐草上官がつとめた。

出雲大社領(約二七〇〇石)宛行は、

各国造一千石の中から上官以下の神職に配分。

上官は一人三〇石(東上官のみ二〇〇石)。

別火と本願は国造から独立して、各五〇石配分。

神仏習合時は、出雲大社領(約二五〇〇石)のうち、

祭田領約三三六石

灯明田領三〇石

神宮寺領一三石

③

出雲大社は、幕府と松江藩の支援を受けて

寛文七年（一六六七）三月晦日

「正殿式」造営遷宮を斎行する。

慶長度「仮殿式」造営遷宮（一六〇九）以来、五八年ぶり

願主―四代將軍徳川家綱

造営総奉行―松江藩初代藩主松平直政

寺社奉行―井上正利、加々爪直澄

出雲国造―千家尊光、北島恒孝

国造名代―長谷正之（千家国造方上官）

佐草自清（北島国造方上官）

## 寛文度造営遷宮の特徴

- 1、本殿を含む境内を大改造した。
- 2、神仏分離を行った。

④

## 1、本殿を含む境内を大改造

本殿は正殿式（高さ八丈Ⅱ約二四呎、六間四方）とした。  
以前は高さ六丈五尺四寸（Ⅱ約二〇呎）、五間四方

本殿を白木（杉材）に統一した。

以前は朱塗りで、柱ははぎ柱（板で柱を包み、外側は黒、内側は朱）であった。

本殿の装飾を極力さけて簡略なものにした。

幕府は二手先詰組、幕股、三手先腰組等を考案していた。

本殿を八雲山麓まで引き上げた。

以前はそこに北島国造邸があったが、吉野川外へ移転した。

境内地を均した。

以前は土石流により境内地は凸凹状態であった。

吉野川（東側）と素鷺川（西側）を石垣で護岸した。

両川の洪水から本殿を守るため。

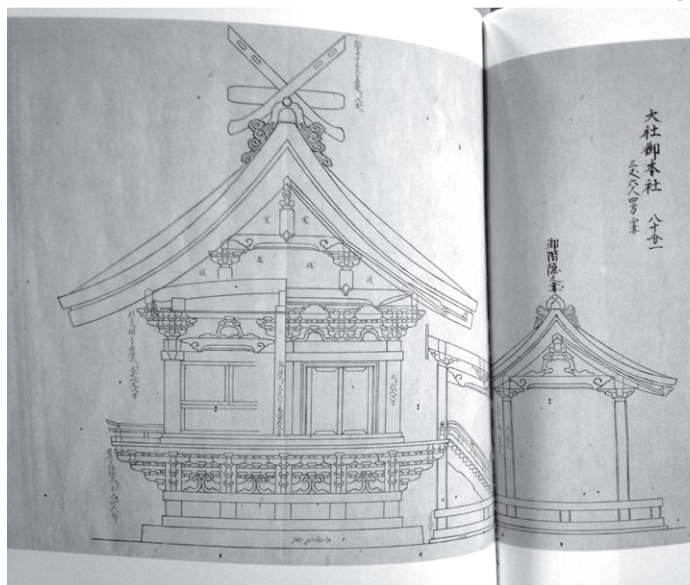
石垣の玉垣・瑞垣・荒垣を整備し、築山にした。

「杵築大社近郷絵図」を見る限り、以前は瑞垣のみであった。

境内地から仏教色を一掃した。

以前は多くの仏教施設が建ち並んでいた。

⑤



幕府側大工が考案した本殿図。二手先や三手先の組物が用いられている。階隠や礎石は慶長度から採用された。  
 (図録『平成の大遷宮 出雲大社展』島根県立古代出雲歴史博物館、平成二五年より抜粋)

⑥



寛文度の造営時の護岸を今に伝えている。右側の石垣は、現北島国造館。左側の石垣は、出雲大社の荒垣。その真ん中が吉野川。吉野川に土石流の形跡が見られる。

⑦

本殿に近接して石垣の玉垣が廻らされている。瑞垣内西側からの写真。玉垣内は瑞垣内よりも高くなっている。瑞垣内が東から西へ傾斜しているのがわかる。



⑧

## 2、神仏分離

幕府や藩との造営交渉の場から本願を外した。藩主松平直政の意向もあり、出雲大社の歴史を良く知る者が交渉人となった。

寛文度の造営遷宮は、神職主導で行われた。以前は本願が主導で行っていたようである。

幕府は本願職を免職し追放に処した。

本願の濫訴が原因とされる。

本願職免職後、境内地から仏教施設を取り除いた。境内地には寺院（神宮寺・天徳寺・所讃寺）や三重塔、梵鐘、護摩堂などが見られた。

年頭御礼（將軍独礼）に上官神職が参列することになった。

それを機に出雲大社の社格向上（神宮の次席）の顕現化をはかる。

社域外東西八町・南北六町の間を神域として、神道の純粋性を確保した。

出雲大社の純神道化は、伊勢神宮を意識してのものであった。「古来僧尼の瑞籬内に入るを禁ず故、社域外東西八町、南北六町之間、寺院無く、最も別当社僧も無し、」（「出雲国造等勘文案」より）

\*別当―鰐淵寺僧（護摩堂）、  
社僧―本願職（神宮寺）

⑨



寛文度造営遷宮以前の境内図を表した「出雲大社近郷絵図」（前掲図録より抜粋）

⑩



本殿が現在の瑞垣にあたる板塀で囲まれている。本殿—楼門—護摩堂—庁舎が直線に並ぶ。三重塔や鐘楼などが見え、瑞垣内が神域、瑞垣外が俗域のようになっていた。



本殿を中心に楼門を正面に玉垣、八足門を正面に瑞垣が廻らされている。  
(出雲大社HPより)

# 寛文度造営遷宮「本殿遷座祭」までの祭祀の流れ①

寛文六年（一六六五）四月三〇日

心御柱立 国造北島恒孝執行

寛文七年（一六六七）閏二月二九日

老中と藩主綱隆との相談で、旧規に准じ近日良辰次第、遷宮執行せよ、との書状が届き、来月晦日に決まる。

同年三月八日

仮殿（慶長度旧本殿）と正殿（新本殿）とを繋ぐ浮橋を懸ける。

同年三月二十四日

両国造、上官、神興昇社籠（権社家、中官、近習、禰宜は三日前、被官神人の社家は当日）

同年三月二十六日

御棟上 国造北島御供祝詞、のち千家尊光祝詞執行

同年三月二十七日

御湯立十三釜神事

## 寛文度造営遷宮「本殿遷座祭」までの祭祀の流れ②

同年三月三〇日（遷宮当日）

日暮、旧本殿にて国造千家御供祝詞、のち北島祝詞

亥刻（午後九～十時頃）、両国造並びに両上官が左（千家右（北島））二列で旧本殿から新本殿へ浮橋を渡り進み、新本殿にて両国造神拝、前の如く旧本殿へ帰る。

亥下刻（午後十～十一時頃）、本殿遷座祭。

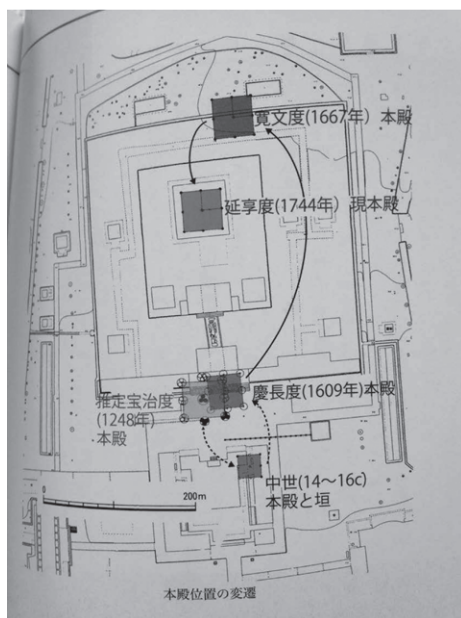
神輿の前（北島恒孝）後（千家尊光）、神輿左脇神剣捧持（佐草自遣）、神輿の左右指几帳。その前後約三百人が左右二列で扈從する。

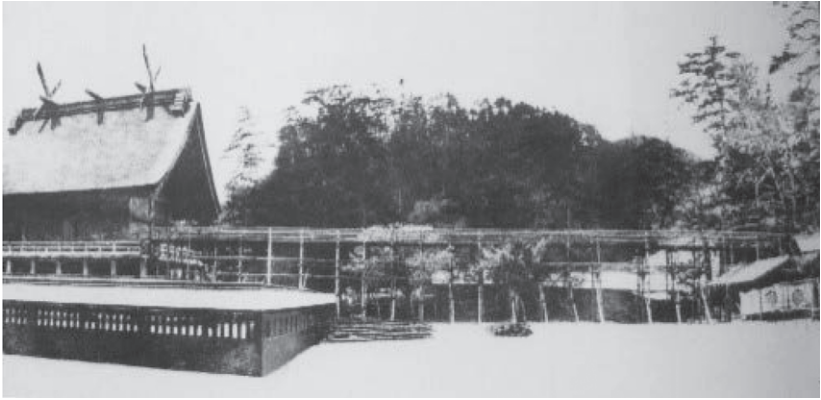
両国造で「小内殿（こうちとの）」へ遷御後、国造千家御供祝詞、のち国造北島祝詞。

同年四月一日

辰刻（午前八時頃）、御安座御供御供祝詞国造千家、のち北島祝詞

本殿鎮座地の変遷図（前掲図録より抜粋）





### 明治度修造遷宮（明治14年・1881年）時の浮橋

本殿と本殿裏（八雲山麓）に鎮座する素戔社（仮殿）との間に浮橋が掛けられた。



本殿遷座祭後の御本殿の縁に、遷座祭に用いられた白木の神輿が見える。

# 神社の造営と祭祀——伊勢と出雲——

講師

櫻井 治男（皇學館大学文学部教授）

パネリスト

中西 正幸（國學院大学神道文化学部教授）

西岡 和彦（國學院大学神道文化学部准教授）

コメンテーター

加瀬 直弥（國學院大学神道文化学部准教授）

錦田 剛志（島根県神社庁参事・万九千神社宮司）

司会

茂木 貞純（國學院大学神道文化学部教授）

茂木 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました國學院大学の茂木でございます。ただいま櫻井先生から「『祭りの場』を調えることの意味——祭祀としての造営を考える——」ということ、まず基調の講演をいただきました。先生のご発題の中で、祭場を調えるという意味でたくさん事例を挙げていただきました。御殿を造営するというだけ

ではなくて、十一項目に分けて様々の神社の事例、あるいは民俗事例なども交えまして、ご解説いただいたわけですから、伊勢神宮や出雲大社のご遷宮というものの原点を考える示唆を与えていただいたのではないかと思っております。

続きまして、中西先生より「伊勢のご遷宮」というご発

題をいただきました。伊勢の神宮の式年遷宮は過去六十二回続いているわけですが、その本質・原点は神嘗祭という年に一度の新しいお米で神饌を奉るお祭りにあるというご指摘をいただきました。三十四回の式年遷宮までは実際そのとおりで、神嘗祭には由貴大御饌を夕と朝にお供えし奉るわけですが、そのあいだにご遷宮が行われたという、最も本質的なご指摘をいただいたわけです。さらに近世復興以降の造営のあり方、そして、遷宮祭というもののが復興以降、神嘗祭と離れてしまっただけで、どのような形で再構築されてきたか、そういう三点について話をいただいたと思っています。

西岡先生におかれましては、出雲大社のご遷宮につきましては、原点は国譲りの神話にあるわけですが、言い伝えによりますと、垂仁天皇の御世に第一回の大遷宮が行われて、以後、およそ六十年に一度ぐらいのかたちで大遷宮が繰り返されてきた。そういうなかで、やはり長い時間が経過しておりますので大きな変化があったわけですが、近世の初頭に現在のかたちに復する。そのかたちの様々な細かいことにつきましてもご説明をいただき、神話以来の伝統に復するというようなお話でなかったかと思います。

お三方の先生のご発題を踏まえまして、これからお二方の先生にまずはコメントをいただきたいと思います。

最初に國學院大學の加瀬直弥准教授にお願いいたします。実は当初、コメンテーターとして東京大学名誉教授の橋本政宣先生を予定しておりました。橋本先生は福井県鯖江市舟津神社の宮司をお務めいらっしやいまして、ご先祖が舟津神社のご造営をしたときのたいへん詳細な文書を残されておりました、そのことを先般ご出版されました、そういう立場からコメントをいただきましたが、実は急なご病気で、皆さまによりしく伝えてほしいということとでありましたので、一言付け加えさせていただきます。そして、加瀬先生には急なご依頼でありましたが、快く引き受けていただきました。それではまず加瀬先生からお願いしたいと思います。

加瀬 ご紹介にあずかりました國學院大學の加瀬でございます。お話にありましたとおり、橋本先生の代打というかたちで登壇をいたしております、全く同じ立場からお話をするということは私にとっては荷の重いことでありますので、先生方のお話をうけたまわっての、私なりの考えをコメントする、というかたちでご理解いただければと思います。

早速本題に入りますが、櫻井先生のお話のなかでは、遷宮のかたちは多様であるというところが一つの要点になると考えております。それから、神宮と出雲大社につきまし

では、時代によって遷宮の形態が変わっていく状況があるということをも具体的にお示しいただいたかと思えます。多様であるということと時代によって変化するということが、そういったことはいろいろな状況のなかで起こりますけれども、そうした中で遷宮をなし遂げるにあたっては、神職の存在が大きいのではないか。先生のお話の中で私なりに考えたことは、そういった点であります。

そもそも神社の建物を建て替え、造り替えたりするということにつきましては、実質的にだれが責任を負ってやっていったかという話になりますと、古代以来、神職の実質的な差配のもとで行われていたのが原則であるという事実があるわけです。古代朝廷の神社制度というものを射程において考えますと、神社の環境維持などに神職の果たす役割はもともと大きかったわけですが、平安時代の初めぐらいになっていきますと、制度としてそれ自身が確立するわけです。朝廷自身も修造に実質的にかかわる部分が出てくるのですが、あくまでもそれは限定的であり例外的つまり、特別な措置として位置づけられてきたと思います。そういった流れのなかで考えていきますと、神職がもつ責任というのは、修造においても、つまり遷宮においても同様であると考えられるわけです。

その原則というのは、たとえば鎌倉時代であれば、『御

成敗式目』の中に修造のことについて記されていたり、あるいは江戸時代であっても、『諸社禰宜神主法度』の中に神社修造のことについて記されています。それぞれの中に、おいて基本的には神職、あるいは神祭りに奉仕する人々が責任を負うといった記述が出てくることでありまして、修造に神職がかかわるといったことについては、通史的な流れであるという理解ができるかと思えます。ただ、実際には神宮にしても大社にしても、例外的な事例というものが見られるわけでありまして、神宮は別格ということになりますけれども、出雲大社についても平安期などにおきましては、やはり朝廷の差配によって修造を行うといった状況が確認されるところです。

ただ、詳細に見ていきますと、基本的なルールに近い方たちでの修造がなされているという状況が見出せます。たとえば神宮にあっても、臨時の修造などにあたって、中西先生のお話にもありましたけれども、古代における造宮使のような、修造の差配を負う立場には、大中臣氏が当たっているというのが基本的な方たちになります。大中臣氏というのは天照大神の神主を自認する氏族でもあるわけですし、朝廷が行う、天皇の思召しのもとで行うということでも、神祭りに携わる人々の周辺で修造というものを実質的に担っていたということは理解できるところです。

出雲大社というのは、先ほど西岡先生がピラミッドという話もしていましたけれども、規模から考えていきますと、一回破損を来してしまえば、当然、大規模な造営というところを想定しなければいけない。そういった状況になりますと、例外的に朝廷が差配して修造するという現実があるということになります。そういった流れのなかで平安後期になると、出雲国内で一丸となって修造を行うという形態、一国平均役という修造形態が起こりうるという実態もあるわけです。

結局のところ神職の存在が重要な位置づけにあり、神社の建物あるいは環境整備などについて担っていたということとは考えられるのではないかと思います。中西先生がおっしゃっていたように、国家造営というかたちで進んでいるなかでありましたが、たとえば明治の際の神饌の供進などにあたっては、神宮の宮司さんがかかわるかたちで祭儀が変わっていった。あるいは西岡先生の場合ですと、建物の仏教色を排除する際にやはり神職が一定の役割を担った。そういった状況がお話からうかがえたところですが、やはり、神職の役割が大きかったということが、私自身は感じ取れるところでした。

それから祭りの場の多様性というお話が櫻井先生からありましたけれども、つまるところ、それぞれの現場におい

て神職が遷宮というかたちを追求していくことになっていく中で、祭りの場を調えるということに関しては多様性が生じてくると特に思います。間違っていることがあれば、あとでご修正いただければと思います。

これから先、質問のほうにつながっていくわけですが、各先生に共通した質問で、簡単ではありますが、若干漠然としたものになっています。各先生に共通するお考えとしてあったものは、遷宮というのは祭儀である、お祭りであるというご理解のもとでお話をされていたと思います。単純に建物の建て替えだけだったら、それは物理的な造作ということになっていくんですけれども、実際は神社におけるご遷宮というのは祭りという要素が非常に大きな意味合いをもっているわけです。実はそのことに私自身はすこし疑問に思っている部分もあるんです。なぜそれがお祭りになっていくのか。そういったものが疑問としてあります。もともと、それを神職が奉仕するということになるが、必然的に祭りとして行う方向になると、自分なりには理解しています。

質問になっていくわけですが、遷宮の祭りに共通性があるのかどうか。祭りとして遷宮を見たときになんらかの共通性が存在するのかどうか。そういったことについてはお伺いしたいところです。たとえば神宮であれば、中

西先生は大神嘗祭ということを指摘なさっています。これはたとえば出雲大社にもその部分が影響を及ぼしている部分があるのかどうか、あるいはほかの祭りの場を調える次元においてもそういった要素があるのかどうか、そういった点に関してはご意見をお伺いしたいところです。

私の関心にそって、前半はとくに好き勝手なことをしゃべってしまいましたが、私自身考えるところがありました。そういったお話をしていただきまして、先生方に感謝申し上げますしだいです。私の疑問を受け止めていただければと思います。

茂木 ありがとうございます。コメントをいただきました。ご質問もいただきましたが、まずは次に錦田先生からコメントを頂戴したいと思います。先生のプロフィールの中にあると思いますけれども、島根県立の古代出雲歴史博物館の専門学芸員としてこれまで活躍をしてこられました。出雲のご専門ですので、そちらのほうの立場からコメントいただきたいと思います。

錦田 ご紹介いただきました出雲から来ました錦田剛志と申します。先生方の様々なご報告を聴きまして、久し振りに学問的な刺激を受けました。まず櫻井先生のお話と中西先生、西岡先生のお話に共通して思いましたことは、本日タイトルにある神社の造営と祭祀を考える、あるいは

祭祀としての造営を考えるとすることは、すなわちご遷宮とは何かということを考える、その問題意識につながってくるのではないかと思います。ご遷宮とは何か。それについては実はきょう会場にお越しの前皇學館大学教授の牟禮仁先生等々と勉強させていただいたり、あるいは中日新聞と山陽中央新報社が、これは一般向けではありませんけれども、「伊勢神宮と出雲大社」というシンポジウムを平成二十三年から毎年一回ずつ、東京、名古屋、出雲で開催しまして、遷宮とは何なのかということをしこし考える機会を与えられましたので、きょうのお話を聴いて、まず自分の思いをお話しさせていただきたいと思います。

先ほどの加瀬先生のお話にもつながってきますけれども、櫻井先生が指摘されたように祭りの場を調える範囲と内容が多様であるということは、そのお社独自の遷宮の様式が多様性に連結していくのではないかと思っております。時間がありませんので、結論的にいうと、遷宮というものが出雲大社のいわゆる「よみがえり」であったり、伊勢神宮の「常若」ということであるならば、原点に返ることによって永遠なる命の連続性なり、祈りの連続性というものを保証していく、担保していく、後世へとつないでいく。そのためには千家和比古権宮司さんが言われるような、起源を繰り返すご遷宮という観念が欠くべからざる話だと思

うんです。起源を繰り返すことによって延々とスパイラル状に原点に回帰し、私たちの命は土に返りますけれども、変わらないものが個々のものとわがが次の世代へと継承されていくだろう。

そうなったときに、起源とは何かと考えたとき、各神社さんにおける、おそらくご鎮座された、あるいは誕生された時の最も最初の姿を繰り返し繰り返し再現するのが遷宮ではないかということです。千家権宮司さんのお話を借りるならば、お伊勢さんの場合は倭姫命のご巡幸を受けて祠を立て、神籬祭祀から社殿祭祀へとということでもいいのかどうかわかりませんが、心御柱がその象徴性を担保するものであり、そのうえにご神体である八咫鏡を奉斎するということを二十年に一回繰り返しすることによって、永遠の原点回帰を行っておられるという言い方。出雲大社はどうかというと、神話伝承にうたわれた壮大な神の宮という、「柱は則ち高く太く、板は則ち広く厚く」という壮大な、先ほどピラミッドのようなという西岡先生のたとえがありましたが、その壮大な神殿を繰り返し繰り返し修造、修繕することで、現実世界にそれを表現していく。それがおそらく原点に回帰するお祭り、遷宮の意味ではないかなと思いました。

したがって、御座を替えることに意味のあるお宮もあれ

ば、柱を立てることに最も遷座・鎮座されたときのクライマックスシーンがあるとすれば、そういうところもあるでしょうし、わが万九千社のように本殿がなくて、磐座の前はどうなのかというと、来年私のところは遷宮ですが、磐座が朽ち壊れて土の中に土砂と一緒に埋めてありますので、それはもう構築できないから、よそから、あるお社から大きな磐座をもらってきて祭るんです。原初回帰を、わが社は来年するつもりでいるんです。ですから、おそらくそういうことが各お宮によってご鎮座されたあの日、あの時、あの場所の畏敬と感謝をこめた祭りの姿を再現するというこの意味で、こうした祭りの多様性、遷宮の多様性というのにつながっていくのではないかなと思いますが、果たして合っているのかどうかはわかりません。

きょうは「伊勢と出雲」というサブタイトルがついておりまして、私は出雲から来ましたので、ここにたいへん興味、関心をもめました。今日の祭祀からいうならば、神宮は神社本庁の本宗でありますから、日本の総氏神様でありますから、これは抗いのない事実として最高至貴の神、天照大神さまをはじめ、様々な神様が祭られている。それはわかります。古代においても、もちろん神宮さんというのは一般の諸社よりもかなり立場が違う。しかし、歴史性を欠いた発言になりますが、時代を経て、時代が大きく動く

時になると、どうも原点に回帰しようとする国民のDNAなのかどうかわかりませんが、不安定になると、お伊勢さんが注目され、出雲さんが注目されるということが起こっているような気がしてなりません。偶然かもしれませんが、その時にお伊勢さんのほうはあまり意識をしていらっしやらないかもしれませんが、どうも出雲さんはお伊勢さんを意識しながら、その総体化のなかで自らのポジションといえますか、立場を確立していらっしやるような気がしてなりません。

たとえば出雲大社さんの九本柱の真ん中の柱は、かつては「岩根御柱」と呼ばれていたはずです。それが近世に近づく頃に「心御柱」という表現に変わっていく。このあたりは西岡先生からもご指摘いただきたいと思うんですけれども、やはり心御柱に対する意識というものがかなり出てくるんだろーと思います。それから、すこしさかのぼって鎌倉時代、宝治二年、一二四八年の大神殿と呼ばれる直系三メートルにも及ぶ三本束ねの柱が見つかりました。これでいくと、高さが十六丈四十八メートルの本殿があった可能性が高いわけですけども、そのときのあの宇豆柱の、いわゆる棟持柱の突出性。これなどは考古学の事象における出雲地方における古代の九本柱の建物、出雲大社のプロトタイプじゃないかと思われるような発掘遺構では、出雲

大社の宇豆柱のように、あんなに突出してないんです。棟持柱（宇豆柱）。なにゆえにあの鎌倉期の宝治二年の大神殿において棟持柱、出雲でいうところの宇豆柱が突出するのか。あれは相当お伊勢さんに対する意識があるのではないかという想像をしています。

そしてもう一つは、寛文の段階における神仏分離の問題です。出雲さんが大きく神仏分離に舵を切る頃、このあたりはのちほど中西先生にお聞きしたいところなんです。お伊勢さんは一層、かつてにも増して厳格な神仏分離を果たされていると思っております。そのあたりの問題。そして、神宮さんの御師が全国に活躍するのを意識してかしないのか、出雲大社の御師（おし）たちが活躍するというところ。このあたり総体化のなかで相互補完を図ろうとした古代のダイナミックな祭祀の精神が、日の昇るところと沈むところと上手に補完しながら、いまに至るまで時を超えて起こっているのではないかなという、ちょっと気宇壮大なことを思いました。

それから、加瀬先生からは、遷宮の多様性と時代によっての変容性の問題をまずご指摘になって、造営のためには何よりも祭りの当事者である神職の影響力が大きいというお話がありました。今日的な課題で申すならば、あるいは私的事実から申すならば、私は造営のために地方公務員を

辞めざるをえなかった。安定した職を捨て、神職の道に邁進しなければ募財ができない。奉賛会組織があるうといえども、神職たる者が二足の草鞋をはいていては、とてもじゃないけど、わが社の造営はなりませんでした。なんとか今年の十二月に仮遷宮をして、来年、本遷宮を迎えるようになっていますが、正直申しまして、この五年間、公務員でなかったから恥をしのんで全国を募財に歩くことができました。おそらくこれがどの時代においても、その当事者意識の最も高まりを見せる人々の働きがかなりの面で影響力を与えたのではないか。御下知は国の沙汰であったとしても、あるいは天皇陛下の勅であったとしても、その実務レベルの人間がどのようにこの造営というものをとらえて、その時代時代において祭祀のなかにおける重要性というものを認識して施策に移して実現したかということにあるのではないかと思っております。

まとまった話はできませんけれども、私のコメントとさせていただきます。以上です。

茂木 ありがとうございます。加瀬先生と錦田先生とお二方にコメントをいただきましたけれども、たいへん限られた時間でありますので、私のほうで整理をさせていただきます。まず加瀬先生のお話のなかでは神職の存在が非常に大きいというお話がありました。実際に出雲大社の寛

文の大遷宮におきましては、上官であった方々の活躍が非常に大きいというお話がありました。伊勢神宮のほうにつきましては、とくにきょうはお話はなかったのですが、中世、式年遷宮を二十年ごとに行うことが困難な時代になってきたなかで、伊勢神宮の神職の活躍も非常に大きいものがありました。そういう点について中西先生のほうから補足といえましょうか、ご説明をいただけるとありがたいと思います。

もう一つ、西岡先生には伊勢神宮のほうは原点が大神嘗祭。では、出雲大社のほうはご造営とお祭りとの関係はどうなのか。その点をご説明いただければありがたいと思います。錦田先生のコメントのなかで、出雲大社のほうはいへん伊勢を意識しているというお話がありました。長い変遷の中で相当祭祀あるいは造営事業も変化しておりますが、そういうなかで伊勢のほうはほぼ二十年、中世に百二十三年間の中断期がありますけれども、ほぼ二十年に一度順調に、といえましょうか、非常に困難な中ではありますけれども、式年遷宮が行われてきたと思うのであります。そのへんを踏まえながら、意識しているというご指摘がありましたので、すこし敷衍をしてご説明いただくとありがたい。これは西岡先生にお願いしたいと思います。

それと、中西先生には、伊勢のほうの神仏分離の話がい

ましましたので、寛文度に出雲大社では神仏分離が行われた、江戸初期、世の中全体は神仏習合の時代に入ってくる頃ですけれども、こういうかたちで行われたわけです。伊勢のほうはどうだったのか。そのへんをご説明いただければありがたいと思います。

じゃ、まず中西先生からお願します。

**中西** まず最初に中世における遷宮が順調にやれなかった時代、つまり仮殿遷宮というのが数多繰り返された。そして、極端なことをいえば、百二十四年間という遷宮の中間期、神主はどうしていたのか、というのはだれしも抱く疑問でありますし、私も実はそのあたりに力をこめて探索したところです。彼らは御師ということですから、地方の信仰の人々のリーダーとなって伊勢へ連れてくる。あるいは、そのきつかけをつくるのが御師の活動というんですが、それも同時に当時としては起こり始めてきたので、そのことに力を尽くしたということです。

それと、御殿が風が吹いて右へ左へと揺れて、あした倒れるか、あさって倒れるかという時代のなかで、神主たちはどうしたかなという問題があります。実は大原則ですけれども、瑞垣内、瑞垣の垣の中、したがって、ご本殿と東宝殿、西宝殿という宝の蔵が建っているところは、神宮当局といえども自由にどうのこうのすることはできないとい

う原則があります。それは朝廷のご命令によって触るということですので、それは今日も守られていると思います。つまり、瑞垣の内は天皇さまがお祭りをなさる場所だ、そして神鏡、八咫鏡がお祭りしてある場所であるからこそ、神宮当局としてはこれを右左するものではないという大原則があります。

だから、仮に神主達が御殿を修繕します。内にある板を持ち出してお宮の用材として使ってくれということ盛んに使います。しかし、最後の一点、朝廷からお許しが出ないかというのは非常に神主が困りまして、そのあたりは御神籤を引いて、右左を決定するというようなことがありますけれども、最後には朝廷からお許しが出たと一同喜んで遷宮の御列を開始したということもありますから、その意味では神主たちはできるだけのことはしていたのだということだけは思っています。

もう一点、お祭り、奉幣祭がとくにそうなんです、御殿をあけて、中へ幣帛を入れるということが奉幣祭としては非常に大事なことなのですが、その行事の中で、あさって朝廷からお許しが出るかもしれないということで、神秘的なにかかわるところの動作というものを絶えずトレーニングしてやっていた。それを、習礼（しゅらい）というのですけれども、それを絶えず日常やっていたという

のが、仮殿遷宮の時代の神主に不可欠であったということだけは十分承知していただきたい。

もう一点は神仏分離ということですね。遷宮の限りにおいていえば、慶光院上人という尼寺がありまして、そのの尼さんが遷宮費を全国から集めてきて、五回、両宮の正遷宮をやったのです。本当に驚くべき努力だったと思います。しかし、寛文年間という江戸期の初期ですけれども、寛文年間には完全に神仏分離の風潮が神宮内外にみながじつておりまして、慶光院上人といえども手が出せない状況になってきたということです。したがって、僧尼というもののがやってくると、一の鳥居から中に入れませんから、その外から拜んでいるという状況だったのですが、それすらも許さなくて、僧尼拝所、僧尼だけが専門でお参りする場所を川の対岸に設けて、外に移すとか、いろいろなことが起こってきたのが寛文年間です。それ以降は遷宮に対して関与することはまかりならんということで、排除されるというのが実情です。

茂木 ありがとうございます。それでは、引き続き西岡先生、よろしくお願いします。

西岡 ご造営とお祭り。出雲大社は明確に大神嘗祭というかたちでご遷宮を行っているということはありません。ご社殿が古くなって、これ以上お祭りを十分続けることが

できなくなったということがわかりましたら、たとえば古代でしたらご造営の申請を朝廷に出す。また、朝廷が実検の上造営を許可したら仮殿造営の場合は地元の大工に、正殿造営の場合は、木工寮工人をお願いした。そして、工事がほとんど完成に達すると、いづごろお祭りしてよろしいでしょうかと朝廷に問い合わせたのです。江戸時代でしたら、幕府に問い合わせましたから、幕府は速やかによい日を定めて行いなさい、と命じたわけです。

出雲大社では祭祀は偶数月が北島国造が、奇数月は千家国造が担当したので、寛文度は奇数月の千家国造のご奉仕だということが決まっておりましたから、それならば三月がいいと。三月は三月会といまして、いまの大祭日が五月。五月は例大祭をやっているんですが、旧暦の三月会がそれに当たります。三月というのは大祭の月でもあり、さらには千家国造の抱え月でもあるということで、三月に行うことになった。ですから、次の遷宮の祭主が北島国造であるとなれば、偶数月になるというわけです。現在ご奉仕なさっているのは千家国造で、もう偶数月とか奇数月といった抱え月はありませんので、五月の例大祭のときに合わせて行っています。例大祭は十四日ですので、十四日の前の五月十日に行ったわけですが、これは明治のご遷宮以来の慣例です。

もう一つは伊勢を意識しているのかということですが、伊勢を意識していない神社は、おそらくどこもないと思います。伊勢は神社の模範ですので、伊勢が模範にふさわしくない神社でしたら意識しませんが、伊勢は常に神社の模範としてずっとあつたわけですから、神社界としましては、どこの神社においても伊勢を意識しているのは言うまでもない。とくに江戸時代になってから古典がもう一度読まれるようになりましたので、伊勢の高天原の神話が非常に大きな位置を占めているということがありまして、どうしても伊勢となれば出雲という意識が、出雲大社側には近世の頃から出てきたのは確かだと思います。

ですから、神仏分離をするならば、伊勢のご正宮のようなシンプルな建物、できれば檜にしたいということで、実は檜にする予定でした。しかし、出雲大社のあの建物を檜にするということは、あれほどの材料が日本にあるのかといったら、ありません。ですから、泣く泣く杉材で、従来杉材でしたから、杉でよろしいですかということで。伊勢のように白木にするならば杉材でも結構でしょうということで杉材にして、できるだけ伊勢のようなシンプルな本来の形、まさに錦田先生がおっしゃったような原点。おそらく原点は白木であつたと考えていたのだろーうと思いますので、白木の、いまのわれわれが見ているあの大社造りです

ね、あの形を再現したというのが江戸時代のご遷宮であり、それをいま現在も継承しているということです。

茂木 ここで加瀬、錦田、両先生のコメントを受けて、櫻井先生にお願いしたいと思います。

櫻井 いろいろと拡散した話をしましたのに、いくつかポイントを突いたご質問にまとめていただいて、ありがとうございます。本日の話題提供としては、ご遷宮というふうにとらえますと、建物の造替ということを意識しますけれども、いろいろなかたちの遷宮の行われ方があつてもいいんじゃないかということでした。それは同時に、各々の地域にある神社の文化的な存在の意義をもうちょっと柔軟にとらえていただいたらと思つたところです。

と申しますのは、先ほど西岡先生が伊勢を模範にしないところはないだろうと。たしかにそうです。先ほどちょっと紹介しましたけれども、伊勢地方のいろいろのお社も遷宮を行われますが、かつては神宮の古材なんかを受けられたところは、その古材を受けて流造を造るわけにいきませんので、逆にこれまであつた社殿の形が伊勢の社殿の形に変わるといふかたちでの影響はあつたと思います。

それから、先ほど中西先生のご発題にも、そして加瀬先生のご発題にもあつたのですが、伊勢の遷宮が神嘗祭と非常にかかわりが深いということ。これは従来も指摘されて

おります。ただ、ご承知のように私の資料（はじめに―②）に初回のご遷宮につきまして『太神宮諸雜事記』を引用しております、そのところに初回は「東御宮地」と書いてあります。「東御宮地」とあるのは、西があつたのかとか、いろいろ悩むわけです。実際にこの資料をどのように位置づけ、どう解釈するかという。そうしたなかで遷宮と神嘗祭は密接な関係があるということは確認してきたわけですが、それは初回のご遷宮が神嘗祭の時にあわせてご遷宮をされたのか、神嘗祭を行っているその大きなかたちとして社殿もお建て替え申し上げて、大きな神嘗祭として行われたのか。このあたりというのはさらに議論を深めていくところがあるだろうと思います。

それから、出雲との関係のなかで、ちょっと話題がそれますけれども、神仏分離の話が寛文年間のこととしてありました。神仏分離が行われたということで関心だけでもつてはなくて、もう一つは、寛文年間に、伊勢の場合ですと、摂末社の再興という、非常に重要な神宮の姿をもとに戻していくような内的な研究や勉強、そして行動も伴われていたということも注目してとらえていく必要があるんじゃないかと思います。

もう一つ、加瀬先生は祭儀を行ううえでの神職の役割についてお話しいただき、それぞれの先生方のご発題があつ

て、錦田さんも本当に神職としてご造営にあたっていらつしやる。現代版の慶光院上人のように全国行脚されたというお話ですが、神職さんがたしかに中心におなりになる。これはあるんですが、そういう神職さんが、じゃ、すべての神社に神職さんとして専属でいらつしたのか。伊勢や出雲とか非常に組織の整った神社で考える部分と、もう一つ、そうでない小さなお社なんかはどうされたのかということも考えておかなければいけない部分をもつてい

ると思います。そうした点から見れば、神職さんというものの位置づけがプロフェッショナルなお立場として登場してくるお社もあれば、地域のそれぞれのコミュニティの中でそのことにふさわしい人が造宮ということをやリ、そうした中で、とくに神ごとにだれが携わるかというかたちでの神職という問題をとらえておくことも大事じゃないかということ

を申し上げておきたいと思っています。  
**茂木** たしかにそうですね。伊勢神宮の場合には本当に天皇が国家の安泰と五穀の豊穰を祈る場所として専門の神職を置き、このような式年遷宮という制度を立てられて、それが守られてきた。そして現在に至っている。そういう格別な伝統をもっていますし、出雲大社のほうでは国譲りという神話時代の伝承に基づいて大社の創建があつて、国

造が守ってきたという祭祀伝統があるわけです。これは非常に格別、特殊といえるでしょうか、個別の神社からみますと、本当に模範といえるでしょうか、そういうものではないかなと思うのであります。

いま三人の先生方からそれぞれお答えをいただきましたし、感想も述べていただいたので、ここでまた一言ずつ加瀬先生と錦田先生にご発言いただきたいと思います。

加瀬 いまのお話をうけたまわったうえで発言ということですが、私自身、神職という言葉を使っていきましたけれども、櫻井先生からご指摘あったとおり、その場で祭りにかわる人という意味で広い意味で見れば、神職というプロフェッショナルでなくてもやはり神社の維持にかかわってくる、そういったことは私自身は考えているところですし、古い時代にはそういったものだったろうと思っております。

一方で、天皇の思し召しがあつて遷宮がなされるという神宮については、朝廷の役割自体を全く捨象しているつもりはありません。けれども、それだけがすべてだったということではなくて、現場のところで人々が準備をして、それでなしえるもの。そういった組み合わせたかたちというものをこれから具体的に考えていく必要があるんじゃないか。そういった趣旨のもとで発言しているということでは

す。コメントを補足するのも変な話ですけども、そのようなかたちで付け加えさせていただきたいと思えます。

錦田 先生方のお話を聞いて、やはりこれからの課題だと思いましたが、それではなぜ寛文の頃に伊勢と出雲で本格的な神仏分離が全国に先駆けて起こるのかというテーマは、課題として残っていくのではないかと思います。これは思想史上の大きな問題があるのではないかという気がしております、今後の課題として残るのではないかということでは。

それから、考えてみたら、お伊勢さんは式年遷宮で、造替遷宮ということだろうと思います。造り替える。出雲さんは造替遷宮、式年遷宮では基本的にはありません。傷んだら、倒壊したら神殿を建てるということで、その時に大神嘗祭にあたるものは何かということになるのですが、そもそも伊勢であろうが、出雲であろうが、少なくともご遷宮の本義というものを考えたときに、私はこれまでシンボジウムや勉強会、あるいは先生方の指導のなかで感じるものは、実は毎年毎年の例祭と各神社で行われる造宮に伴う祭祀というものは、根源的な意味では同じなのではないか。すなわち円環する時間の一年なら一年、一日なら一日、あるいは式年なら式年、何十年に一回なら何十年に一回、そのお宮にとって神様の鎮座されたであろうあの日、あの時、

あの場所を再現するであろう例祭を、最も丁重にして、建物から、あるいは神宝装束から、お造り替えしてご奉仕申し上げる。それが実は遷宮の意味であるとするならば、そのお宮にとって一年で最も大事な例祭、あるいは神嘗祭、あるいは陛下にとつては新嘗祭の拡大版が、やがて神宮でいえる神嘗祭であり、陛下で申し上げれば新嘗祭に該当するという構造で考えていったほうがいいのではないかという感想をもちました。

茂木 ありがとうございます。

ここで、会場からいくつか質問が来ておりますので、西岡先生と中西先生にお答えいただきたいと思います。まず、中西先生には二つお答えいただきたいと思います。一つは茶道教授の方からですが、お祭りの中での神饌の位置という質問です。一般的な質問なんですけれども、できれば伊勢神宮の神饌を踏まえて神饌の意義をご説明いただければありがたいと思います。もう一つ、神宮の正宮も朱塗りの時期があつたというのは本当でしょうかという疑問の質問が来ておりますので、これも簡潔にお答えいただければと思います。

中西 神社の祭りにとつて神饌とはいちばん大事なものです。つまり、地域の人々が神様に飲物や食物をあげるということで、地方の人々の総力が集まったものというのが

神饌の基本的な性格だろうと思います。そういう意味では幣帛とは全然質が違ふ。幣帛は外部からその神社に対して奉るもの。神饌は内部の地域の力を集めたかたちで奉るものということです。そういう全然違ふという意味で、とにかく神饌というものは大事なものだということは十分承知しております。

問題は、現在の神宮の神饌ということになるんでしょうけれども、神宮の神饌というのは明治の時代に形が整えられました。それまでは神饌を出す地域が一点毎に違っており、競つて形の不統一なものでも神饌として差し上げました。それを形が整った規格品のようなかたちで神饌を新たに形成し直したのが明治十年のことです。そのかたちでは現在もやつておりますけれども、伝統的なものについてはすこしはつきりしないというのが神宮の状況です。そのようなことをありていに申し上げます。

もう一点、正殿が朱塗りというのは、どの文献に出てくるのかよくわからないものですから、私の見たかぎりは素木ではないかという感じです。

茂木 ありがとうございます。神饌のことにつきましては、非常に控えめにお答えになりましたが、伊勢・志摩はまさに御贄の国で、たいへんおいしいものが今も獲れるわけです。アワビや魚介類がたいへん豊富で、ずっと伊

勢の神宮の神饌として上がっているわけですので、おそらくそういう場所が伊勢神宮にふさわしい場所として選ばれたのではないかなとも思うわけです。

西岡先生にも二つお願いします。これは神仏分離のなかで本願の追放とありますが、本願とは何ですか。これは先ほどの話をすこし敷衍してご説明いただければと思います。もう一つは、ちょっと専門的といましようか、大国主命の国譲りののち、すぐにその条件である大社を天照大神の側が創建したのではなく、だいぶのちになって創建したようにうかがっています。が、実際の創建年代を教えてくださいというご質問です。

西岡 本願というのは、一般の神社にもよく見られたもので、お宮にいますお坊さん、社僧という方です。こういう方が、とくに中世になってくると盛んに現れました。中世は経済的に非常に悪くなりましたので、大名からお金をいただくとか朝廷からお金をいただくということはほとんど無理になっている。そうすると、神社としては経済的に維持するのもたいへん難しくなりました。それに、お宮が傷んだからそれを修理するなり建て替えるなりすれば、さらに不景気な中にお金が必要となり、神社としてはアップアップ状態になってしまふ。そこで、専門的な、とくにいろいろな地方を巡って募金活動をする、勸化をする勸進聖

というのが出てくるわけです。それが神社の中に組織として入り込んでくると、本願職というかたちで、専門にその神社の経理とかいろいろなことに携わってくるようになる。出雲大社もそのようになるわけです。

ただ、全く見ず知らずの方がなるかというところ、おそらく最初はそうでしたが、だんだん姻戚関係をどんどんつくっていきます。日本のお坊さんは結婚しますから、姻戚関係をつくって、社家の方とも姻戚関係をつくる。または社家の次男さんや三男さんが本願になっていくということで、出雲大社の本願さんでしたら、北島国造さんのご親戚がやっていますから、そういうことで非常によく知られた、非常に信頼の厚い方がだいたいなっています。全く見ず知らずの方がやるということはまずありえないと思われます。それから、出雲大社の創建年代はいつかということですが、それも、それがわかれば錦田先生は苦労していないと思います（笑）。斉明天皇五年の時に出雲の国造に神の宮を建てなさいという命令があったというのが『日本書紀』に出てくる唯一の資料です。ただ、国譲りのところにあつたのは、神代の頃というのはお互いの理念をいつているところなんです。だから、出雲側が言っている理念なのか、大和朝廷側が言っている理念なのか、これはまたいろいろな見方があるわけです。国譲りというのは天孫降臨を行う

ために必ず行わなければならない。国譲りを行わない限り、天孫降臨は行えません。天孫降臨が行えない限りは、伊勢神宮というのはいんですから。ですから、日本が始まるためには、国家が始まるためには、天孫降臨はどうしてもしなければならぬ。その前の国譲りについて出雲大社は建てられたことになっています。

出雲大社は『日本書紀』では天日隅宮といわれております。中には、伊勢神宮は日の出の地方で、出雲が日の沈む夕日の地方、天日隅というのは夕方になると太陽が落ちる隅っこ辺鄙なところだという説もありますけれども、私なんかはそういう説はとりません。そんな意味の宮殿を条件にして国譲りをしてくださいということは考えられない。あのときに高皇産靈尊は顕幽分治とともに、天日隅宮以下七か条を出されていて、その七か条の中に気に障るようなものを入れるはずがない。それくらい慎重に七か条の譲歩をされて、その中の一つに天日隅宮があるということです。それから、天日隅宮はどういうお宮かというのは私は別に一本書いておりますけれども、要は、天皇の宮殿である「天御蔭日御蔭」と同等の非常に立派な建物であるということです。したがって、国譲りのあとに建てられてないとか建てられたとかいうようなものではない。それはあくまでも大和朝廷側と、おそらく出雲側の理念の調整したところにあ

る。わが国がどのようにして始まっていくかという過程に出雲大社があるんだというところに重きを置いていただきたい。実際に建てられたのは斉明天皇の時かもしれませんけれども、それはそれとして、そういうふうと考えております。

茂木 ありがとうございます。いろいろと討議を重ねてまいりましたが、そろそろ時間になりました。私たちの遠い先祖は自然の中に神々をお祭りしてきました。自然の中の磐座だとか神籬だとか、非常に靈性を感じる大きな岩や神木を対象にしてお祭りをしていたのではないかなと思います。ただ、そういう場所は自然の中ではありますけれども、非常に清らかにしてからそういうお祭りがとり行われたのだらうと思います。現在の鎮守の森に象徴されるように、たいへん瑞々しい緑に囲まれていて、しかも天候の具合では一日で荒れた状況になってしまうにもかかわらず、いつもいつも清められて、そういうところでお祭りが続けてこられたのだらうと思います。いつしか神殿が造られるようになり、これもやはり、清浄のうちにも清浄を期して、あるいはそういうところの神座となるものは毎年新しくされるのか、櫻井先生のお話にありましたように、様々な私たちのお祭りをするための準備、あるいはそれ自身がお祭りとして認識されてこられたのではないか。

そういう意味で伊勢神宮はおよそ二千年前に伊勢に鎮座され、千三百年前から二十年に一度の遷宮が始められて、今日まで続けてこられた。そして出雲大社のほうでも今年、六十年、江戸時代以降は六十年ごとに大遷宮が行われて、重なる年であるというたいへん珍しい年にめぐり合ったわけです。そういうなかで日本の神々のこと、原点を考えるいい機会になったのではないかと思っております。きょうご発題いただきました五人の先生方に改めて感謝を申し上げて、きょうのシンポジウムを閉じたいと思います。ありがとうございます。